時評

"情報化時代"だといわれる。

スポーツ界も御多聞にもれない。

競技団体の運営に内外の情報が大きな要素となって来たのを「流行」の一言で片づけてしまうわけにはいかない。

事業の拡大化、国際化は当然のように情報を求める。それが競技力の向上、競技の普及に一役買うのだ。

わがハンドボール界はどうかいささか時の流れに遅れているのではないかと思うのだが失言ならばお許し願いたい。

例えば―地方協会役員はよく本部に「地方の実情を知らなすぎる」という。たしかに本部の地方協会に関する資料は少ない

中央の情報が地方へ送りこまれないという不満も耳にする。

機関誌と議事録だけが中央→地方の唯一のパイプというのではたよりないことである。

しかし、地方から中央への情報提供も満足な状態ではない。

4月10日現在、今年の事業日程を本部に送ってくれた地方協会はわずかに2県だけである。

それどころか、本部が地方協会に対して報告・回答を求めるアンケートの回収率が80パーセントをこえることはめったにないという。

本部の地方対策の遅れを責める一方、地方協会関係者ももうすこし"自分たちの状態"を自発的に中央へ知らせる努力をすべきではないか。

この問題はなにも地方→中央だけではない。隣県同士の情報交換も積極化されるべきだ。（ブロック協会という機関がうまく活かされていないのも、実はそうした平常の接触のなさに一つの原因がある。）

日本協会の事業がここのところ頭打ちという印象を与えるのも、よい情報を集めるルートに欠陥があり、施策につながる情勢分析ができないためであろう。

オリンピックへ、世界へと大きな夢を抱く斯界が、基本的なシステムに弱点をのぞかせているようでは前途多難だと思う。

本部・地方を問わず組織の役員は、つねに新しい感覚で突き進んで欲しい。そうでなければせっかくの"世界のトップレベル"も埋れてしまうことになる。

世界選手権での好成績が、昨夏の欧州遠征という身をもって味った情報と、本大会前の村田監督ら選手強化対策委員による情報収集の所産であったことは身近かな"教訓"ではないだろうか。（X）

ミュンヘンへの道

世界選手権もベストエイト入りは逃したが、世界の強豪に伍す実力のあるところを世界に示すことができた。

ハンドボールの先進地域から遠く離れた東洋の片隅で、きわめて不利な条件の中で、よくこれだけに成長したという世界の球界関係者の声もきかれたという。

しかしながら、実力があがったとは云え、超一流の実力を兼ね備えるところまではいっていない。

往路の長い旅行による疲労、生活習慣の大きな隔り、ヨーロッパ諸国との交流のなさ、など大きなハンディがある。

しかし、ハンディがある、不利な条件が多いなどと泣き言を並べたところで、順位があがる訳ではない。この条件でも、勝ち抜けるチームを作っていかなければならない。

ミュンヘンへはどうやら参加できそうだという、明るい見通しは得られたようだ。

しかし、参加するだけでは何にもならない。そこで好成績を収めないことには、参加することがかえってアダとなることもありえよう。

残る二年間、トップの強化を第一目標にして、つき進み、あくまでもメダルを目標に強化することが必要であろう。

これは決っして夢ではない。力はある。現実に手が届くものだ。あとはいかに期間中トップコンディションを持続させ、もてる力を十分に発揮するかにかかってきている。

それには、不断の心がけが必要である。国内のすべての試合が厳しく、一瞬たりとゆるがせにできないような試合の連続となり、国内がレベルアップすることも必要である。ナショナルチームのメンバーだけが突出しているのではだめだ。広い選手層、高いレベルをもっている多くの選手、その選手達による厳しい試合。そこから選ばれたナショナルメンバーの精神。それを支える体制、こういったものがすべてきわめて短い間に整備されなければならない。

ミュンヘンで我が国が好成績を残せるかどうかは、全国のハンドボールマン一人一人の努力にかかっている。決っしてナショナルチームのメンバーだけにかかっているのではない。そのことを一人一人がもう一度肝に銘じて、このチャンスを生かすよう各自のもち場で努力すべきだ。（TF）

「ハンドボール」5月号（第75号）目次

―世界選手権特集②―

表紙　第7回男子世界選手権
日本―チェコ戦
（70年2月26日バイヨンヌ）
時事通信社提供

ミュンヘン候補（第1次）18人を発表

オリンピック対策部も新設

部長に村田氏

2年後に行われるミュンヘン・オリンピックをめざす日本ハンドボールチームの第一次候補選手18人発表がされた。——日本協会では4月26日、東京・岸記念体育館で全国評議員・理事合同会議を開き今後の頂点強化対策を主に協議した。

日本ハンドボール界にとっては初めてのオリンピックに対して全力を注ぐというこれまでの基本方針を再確認、選手強化対策委員会をオリンピック対策部と技術指導部に分立、同委を発展的解消することにしたほか、同委によって推せんされたミュンヘン・オリンピック第一次候補選手を全会一致で承認した。

日本協会がオリンピック候補、オリンピック対策部を設けるのは史上初めてであり、〝ミュンヘン〟へ照準をあてて大きなステップを踏み出したことは多いに期待される。

発表された18人の第一次候補選手は別表のとおりだが、3月フランスで行われた第7回世界男子7人制選手権の全日本代表選手14名がそっくり推されたほか、昨夏の欧州遠征に参加した平岡（大崎電気）、有永（立教大）がカムバック、さらに新実（芝浦工大）、花輪（中央大）の両新鋭が加えられたのは注目されよう。

日本協会の意向では、今後ミュンヘンオリンピックまで候補選手の選こうは一切、新たに発足したオリンピック対策部に委せるが、候補選手の入れ替えは積極的に行う予定で、とりあえず今夏の全日本総合選手権（8月18日～22日・和歌山県打田町）終了時に最低2名の第一次候補追加選手を選びだし、その後も機を見て第二次、第三次候補を発表することになった。

原則として候補選手は20名以内におさえ、ミュンヘン・オリンピックまでの間に行われる国際試合の全日本代表（ナショナルチーム）は、その時点の候補選手のなかから選出されることも決められた。

日本ハンドボール協会
ミュンヘン五輪第1次候補選手

GK	本田　洋	（日体大4年・22）
	下里　敏彦	（大崎電気・23）
FP	竹野　奉昭	（大崎電気・33）
	江名　英彦	（三　景・26）
	近藤　信行	（大崎電気・26）
	近森　克彦	（大崎電気・24）
	飯田　誠行	（大崎電気・24）
	木野　実	（ワクナガ薬品・24）
	東　一敏	（大崎電気・24）
	早川　清孝	（ワクナガ薬品・23）
	野田　清	（大同製鋼・23）
	平岡　秀雄	（大崎電気・23）
	藤中　憲二	（大同製鋼・23）
	斎藤　光男	（日体大4年・22）
	中井　武三	（同志社大4年・21）
	有永　修二	（立教大4年・21）
	新実　俊夫	（芝浦工大3年・21）
	花輪　博	（中央大2年・19）

強化対策委は発展的解消

技術指導部長に勝氏（内定）

頂点強化の担当はこれまで選手強化対策委員会となっていたが、焦点をいっそうしぼりこむため「オリンピック対策部」を特設することが決められ、同部はオリンピックをめざす男子の最頂点の徹底強化のみを企ることとした。

このため女子の頂点強化や一般のレベルアップなどは新たに技術指導部を発足させてカバー、結果的には選手強化対策委を発展的解消させ、オリンピック対策部と技術指導部が誕生したわけだ。

両部の人事については、オリンピック対策部長には3月の世界選手権監督をつとめた村田弘氏（日体大出）を推す常務理事会案を承認、技術指導部長については田村会長、荒川理事長、村田オリンピック対策部長が協議した末、勝繁夫氏（40才・立教大出、第1回世界学生・第6回世界選手権・昨夏欧州遠征各コーチ）を推せん、会議も了承した。

村田、勝両新部長はともに常務理事（会長推せん理事）となる。

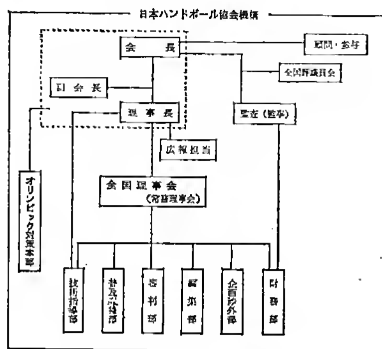
（＝4月26日付）。

積極的な施策期待

新発足したオリンピック対策部と指術指導部の構成については5月なかばまでに両部長から発表される予定だが、オリンピック対策部は村田部長のほかコーチ一名と若干の対策部員がおかれよう。

また、技術指導部は、旧選手強化対策委員会が45年度からの実施を希望していた。「強化」「指導」

日本協会、機構の一部手直し



○……昭和45年度役員……○

▽会　　長　田村正衛
▽副 会 長　西　敏郎、保坂周助、渡辺和美
▽理 事 長　荒川清美
▽オリンピック対策部長　村田　弘
▽審判部長（常務理事）　安藤純光
▽技術指導部長（〃）　勝　繁夫（内定）
▽普及部長　（〃）　若崎重富
▽財務部長　（〃）　森岡毅雄
▽総務企画部長（〃）　杉山　茂
▽編集部長　（〃）　藤本　強
▽常務理事　入江暢一、佐久間義雄、宮崎慎六、山田計、嶋田新太郎、渡辺一己、田中秀夫、田中滋章
▽理　　事　岡村昭二、飯田昭、石切山稔治、佐藤敦、油井孝一郎、栗脇　疑、森田正英、辻　一義，越智　武、藤田八郎、平仲孝栄、久保義雄、平出　一、清水　正、町田歳雄
▽監　　事　山田　稔、古賀健一郎

「研究」の三パートによってささえられることになりそうで「強化パート」はさらに男・女に分けられる。

スタッフは、旧強化対策委員のうち、村田氏と候補選手になった竹野氏の二人を除く10氏（稲石三二、中沢重夫、北川勇喜、高橋英次、近藤金博、井薫、宮原俊隆、鈴木義男、池田鉄哉、渡辺慶寿の各氏）がそのまま技術指導部員をつとめることは確定的である。

事業計画については、本誌〆切までに具体的発表はないが、すでに村田氏によって報告されている「昭和45年度強化事業計画」（本誌73号2頁参照）がそれぞれの目的によって両部にふりわけられるとみたい。

また、両部合同会議や、両部と審判部合同会議などの新設も予想されるが両部間のスムースな連けいとともに積極的な活動を期待したい。

今後にも残る希望の道

候補選手の入替えは活発に

ところで、斯界初のオリンピック候補選手の顔ぶれは若さ、巧さ力と多彩である。

3月の世界選手権代表がそっくり選ばれ、今回の発表の主体となっていることに対して「当然だ」という声と「世界選手権代表チームをとりあえず解体、白紙から選び出すべきだ」という意見に分かれたが、村田オリンピック対策部長は「今春の世界選手権代表のうち、2年後までその力を保持できるかどうか不安な選手もいるが、現時点では今回の代表14人の力と技は国内最上位にあるものであり後進への目標・刺激になる点でもそのまま第一次候補とすることはまちがっていない」と説明しており候補選手の入れ替えを活発に行うことなどもあって、この意見が多くの支持を得た。

第一次候補にもれた在野の新鋭・若手にもオリンピックへの道は大きく開かれているのであり「オリンピック代表にこの第一次候補から一人も選ばれないこともありうる」（藤本常務理事）わけで、「第二次、第三次候補をめざして新進プレイヤーの精進を切望したい」（荒川理事長）というのが一つの狙いである。

4年前に強化選手発表

日本協会が「ミュンヘン」の名を冠したトッププレイヤーを指定したのは実は今回が初めてではない。

昭和41年9月27日に第6回世界男子7人制選手権（42年1月・スウェーデン）へ出場する全日本代表候補28名を決定した際当時の高嶋理事長は、この選手たちを「ミュンヘン・オリンピック強化選手」にすると記者発表の席上語っている。

この28名のなかから41年9月に来日した中共ナショナルと対戦した全日本代表チームや42年1月の第6回世界男子7人制選手権代表が選出されたのを覚えていられる読者も多いハズだ。

ちなみに、その時の28名のなかから今回の第一次候補選手に推せんされたのは竹野、江名、近藤（当時芝浦工大）、近森（同）、木野（当時立教大）、飯田（当時同志社大）の6選手である。

コーチ会議へ派遣

日本協会は8月2日から7日までストックフォルムで行われる第2回国際ハンドボール連盟主催のコーチシンポジュウムに1〜2名を派遣することに決めた。

●特集●

年少層対策を考え

文部次官通達の一部緩和（本誌72号参照）によって各競技団体ではいっせいに年少層対策にとりくみすでにいくつかの少年・少女による全国大会開催の計画も発表されている。

競技の普及、底辺の拡大をめざすハンドボール界にとっても願ってもないチャンスを迎えたわけだが、他競技に比べて年少層への浸透は未だしの感を否めないだけに日本協会の積極的な姿勢が期待されている。【カット写真は全日本実業団選手権（2月・名古屋）の入場式でプラカードを持ち各チームの先導をつとめた名古屋市内のハンドボール少年団員たち】

まず、日本協会が年少層対策への基礎データを収集するため各都道府県協会から「中学ハンドボール」「ハンドボール少年団」などの現状報告をうけた結果をみてみよう。

総務企画部によって送られたアンケートは、問題への関心の高さを示すように33協会から回答が寄せられた。

問1、各県の中学校ハンドボールについて

▽【A】県協会主催の事業として「県中学校ハンドボール大会」を行っている県……11協会

▽【B】「県中学校総合体育大会」の一種目としてハンドボールが実施されている県……17協会

▽A・Bどちらも行われていない県……14協会

※数字の合計が回答数（33）をオーバーするのはA・Bをともに開催している協会があるため。

〔解説〕A及びBの両方の事業を行っている県協会は9つ（東京、茨城、山梨、福井、奈良、和歌山兵庫、高知、熊本）にすぎない。

県中学総体の種目になっているのだからあえて協会主催の中学大会は設けなくてもよいという考えかたや、県によっては総体以外に県大会を認めていない所もあるのが一因といえる。

まったく中学大会を行っていない県が14もあったことは、未回答県（14協会）の大半も無活動とみなされるだけに協会首脳陣を落たんさせる数字のようだ。

今年度から実施の予定があると明記しているのは2協会（福岡・沖縄）だけに、一年後もあまり伸びは期待できまい。できるだけ早く始めたいというのは埼玉など6協会。なお、日本体育協会（体協）が調査した資料によると、各県中体連へのハンドボールの加盟状況は18県である。

問2、各県の中学校ハンドボールチーム数

〔解説〕数字が報告されたのは17県で男子三一二、女子一八八校。福井、岐阜両県は活動を行っているが実数不明という。

この数字には大会が開かれるたびに編成されるチーム（学校）は含まれていないから、全国の概算は男子四〇〇、女子二五〇。競技人口約一万五千人とみてよいだろう

問3、各県のハンドボール少年団について

▽県協会主催でハンドボール少年団事業を行っている……2協会

〃 行っていない……29協会

（未回答2協会）

〔解説〕予想されていたこととはいえ県協会施策としてスポーツ少年団事業を行っているのが愛知と京都だけというのはあまりにも少なすぎよう。未回答県のうち活動が伝えられているのは新潟、神奈川、福岡などだがそれらを含めても十指に満たない。完全にこの面での立ち遅れを示していないだろうか。

ハンドボール少年団数は報告をうけた分では茨城、愛知、大阪の各3、京都2、東京富山各1である。体協の発表（別表）と食いちがう面もあるようにスポーツ少年団は変動がはげしいといわれ実数はつかみにくいと全国でいちおう30ぐらいではないかと推される。この中には「球技少年団」と呼ばれるものは含まない。（体協が44年3月現在で発表した数字では全国のハンドボール少年団は、18団員数は602名である。）

特筆されるのは愛知を中心とした東海協会の「交歓会」（本誌69号参照）。愛知協会の年少層対策は全国屈指であり、中学校球界、少年団活動はすばらしい発展ぶりだ。名古屋市では小学校ハンドボールも年毎に盛んになっている。

少年団活動ではカット写真のような全国大会への協力なども積極的で、正色ハンドボールスポーツ少年団（名古屋）の西川勤君からは別掲の作文が寄せられている。

このほか富山協会が「氷見市ハンドボール教室」、滋賀協会が「小・中学校教員指導会」を行っているという。地味ながらこうした活動が、将来大きな実となり花となることはうたがいない。

—中学校ハンドボールチーム数—
（今回の調査による）

東京	45	25
茨城	20	14
栃木	8	5
山梨	14	8
石川	10	3
富山	28	0
福井	?	?
愛知	58	38
岐阜	?	?
滋賀	7	5
京都	7	3
大阪	34	22
奈良	11	5
和歌山	6	3
兵庫	16	10
高知	6	2
香川	6	6
熊本	30	35
鹿児島	6	4

—ハンドボール少年団数—（44年3月現在・日体協発表）

茨城	4	(112)
東京	2	(60)
新潟	2	(73)
富山	2	(36)
滋賀	1	(24)
京都	1	(11)
大阪	1	(126)
兵庫	1	(27)
山口	3	(93)
熊本	1	(40)

（ ）内は団員数

全国（少年）大会は時期尚早

問4、全国中学校ハンドボール大会について

▽全国大会を開くべきだ
　積極的賛成……1協会
　消極的賛成……4協会
※消極的賛成とは「開くべきだが問題点も多い」としたもの。
▽全国大会の必要はまったくない……0
▽ブロック大会をまず開き近い将来全国大会を開く……18協会
▽県内への普反が最優先……18協会

〔解説〕今回のアンケートでもつともその結果が注目された。

　さすがに時流を反映して開催の要なしとするものは一つもなかったが、今すぐにとなると消極派をふくめてもわずかに5協会だけである。

　ブロック大会をまずという県と、県内への普及を最優先という県が同数(18)なのはこの問題の難しさを示している。

　問1と問3の結果に照合してみればこの数字もまたやむを得ないといえよう。

　全国大会を開くことによって底辺が伸びることもあるし、底辺がまったく固まらないうちに全国大会を開いても寒々とした内容に終ってかえって逆効果という心配もおきる。

　日本協会・荒川理事長は「ここ1～2年のうち全国9ブロックでより働きかける」といっており、すでに北陸3県大会が今夏8月開かれる予定だ。東海も時間の問題といわれており、2年の時日をかければ一応の目標は達せられそうだがブロック協会そのものの活動が確立されるかどうかも一つのカギではないか。

×　×　×

アンケートのおもな結果は以上のようなものだ。

　高校及び実業団（社会人）への普及に躍起となって来た斯界だけに年少層対策はこの数字をみるまでもなくあまりにも〝未完成〟である。

　しかし、現実に各競技団体が華々しく全国規模の事業を打ち出しているのを見ていると、このムードに乗り遅れてはならないという感じを強める。

　日本協会では近く特別委員会を編成して検討するようだが好企画の発表が待望されよう。

　前述のうち、全国大会の問題点（消極的賛成）として指摘されたのは主に「経費をどこが負担するか」（山梨、愛知、滋賀、京都、大阪、和歌山）「健康管理」（愛知、和歌山）、「つきそいの教員の勤務問題」（和歌山）といった点だ。

マンガや劇映画の活用？

　年少層対策がなぜ遅れているかについては多くの原因が考えられる。アンケートにそえて送られて来た各県役員による「意見」を基にさぐってみた――。

　もっとも大きなことはいかにして年少層へどのような形で〝ハンドボール〟に興味をもたせるかだ。

　「バレーや野球やTVの動画を利用して少年少女の関心を高めているのも一方法」（滋賀・尾本和男、石川・松林喜久男氏）という意見もある。

　「これまで中学校の体育教材になかったのが痛い」（沖縄・平仲孝栄氏ほか多数）というのもたしかに響いているようだが昭和47年度からの要項改正で「今後は明かるい見とおしがたとう」（東京・松田利秋氏ほか多数）。

　中学校の体育授業でもしきりに行われていたというが前回の要項改訂でまったく下火になったという静岡県の〝事実〟（片瀬喜代次氏）もあり、中学スポーツでは授業とクラブ活動の密着が大きな作用をしているということがいつそうはつきりする。

　要項への復活でそれならば前途は洋々だろうか。課題は多いのである。

　特に「指導者の不足」（島根・高尾茂氏ほか多数）は深刻だ。

　体協の調査（昭和44年3月発表）によると全国の中学校に配属されている先生のうちハンドボール指導をできる人は三〇七六人とされている。決して少くはない。

　ところが、その人たちは指導しようにも競技そのものが行われていないというのが実情ではなかろうか

　彼らに活躍の場を改めて与えるため「各教育委員会などに中学校指導者講習会を開くよう呼びかけて欲しい」（宮城・福島富造氏）という日本協会への要望もみられる。

　「中学校体育指導者側にも教材として採用された関係で関心が高まっておりこの期に講習会を積極的に開くべきだ。授業で採りあげ次に大会というステップを踏むのがよい」（鹿児島・古市寿夫氏）ことになる。

　日本協会と全日本教職員連盟では8月中旬四日市市で「全国中学校指導者講習会」を開く予定にしており、タイムリーな企画となろう。

普及は学校・社会両面から

　中学層への普及を企るうえに「

小学校での実施」（茨城・住谷稔）も強い声となっている。「ドッヂボールをやめさせてハンドボールを教材に」（尾本氏）、と「小学校球技としての採用を働きかける」（奈良・久保田広次氏）などが具体的な対策ということになろうが、これとても「指導者の不足」（各氏）という悩みがかくされている。

「簡易ハンドボールのパンフレットを作って小学生への普及を考りよ中」（松田氏）「ハンドボールスクールの開設など社会体育面の活用」（松林氏、愛知・西川勤也氏）もよい結果を得るためには必要な手段だろう。

「年少者の体格は大きくなるばかりだが体力の不足がめだつ。走・跳・投の三要素をもりこんだハンドボールなどの活動をなるべく小さい時から実施すべきだ」（和歌山・中井泰彦氏）。

社会体育に〝入口〟を求めようとする意見も多い。「サッカースクール、ママさんバレー、水泳クラブなどの例をみるようにまず父兄へのＰＲから」（大阪・山中善之祐氏）というのもうなずける。

だが一方に「学校体育の中で実施せねば指導しにくい」（大分・財前久範氏）という考えも強く、結局は学校体育、社会体育の両面からとなってしまうのではないか

それにしても、地方協会だけにこの大きな問題の負担がかけられているのはまずい。「日本協会の積極的な態度を待つ」（徳島・田岡忠氏）声も大きいし「県中体連と手をくんでいく」（岡山・辻一義氏）のも方法だ。しかし中体連は地域によってはかなり考えかたがちがうようであり、日本協会↔全国中体連（本部・東京）という関係も簡単に行きそうもない。

全国中体連は、高体連のような競技別の委員会を設ける意向があまりないと伝えられるだけになおさらでである。

頂点の活躍も欠かせず

このほか「県内の高校界の拡張がもう一歩進まないため中学層にも侵透していかない」（栃木・渡辺繁氏）「県協会役員に時間と人手がたりない」（財前氏）とする県もみられる。

今でさえ一般、高校界の行事に追いまくられているところへ〝年少層対策〟という大課題が加ったらとの懸念があるのも肯ける。

だが一日の遅れも許されない問題だ。「高校の大会の時にスポーツ教室として中学校のオープン試合を行った」（佐賀・甲斐忠義氏）「佐原市で少年小女スポーツ教室の一環として催した」（千葉・猪服俊二氏）といった報告が全国から寄せられるのを待望したい。

中学ハンドボールにしろ、ハンドボール少年団にしろ各県協会の努力もさることながら、もっとも効果的だと思われるのは「世界選手権に勝ち、オリンピックへ出場すべきだ」（尾本氏）ということにつきようか。

サッカーの急激な発展、バレーボールの驚異的な人気はたしかに頂点に立つプレイヤーの活躍が少年や少女たちの憧れが大きな背景の一つになっている。

競技団体の使命は競技力の向上と普及だ。年少層対策はそのうちどちらか一つが欠けても実らすことはできないだろう。

「活動促進のため日本協会内にも地方協会内にも専門委員会を設ける。ためらいは許されない」（福井・中村九郎右衛門氏）――。

【文責・編集部】

楽しい少年団活動

名古屋市正色ハンドボールスポーツ少年団

西川　勤

ぼくは、去年の夏、スポーツ少年団員として初めて、東海地区ハンドボールスポーツ少年団の、蒲郡キャンプ（一泊二日）に、参加した。

今年は、二月七日に、愛知県体育館で行なわれる、高松宮杯実業団ハンドボール選手権大会の、プラカード持ちに参加しました。

一カ月ほど前から、この話を聞いてその日が来るのが、とても待ちどおしかった。

いよいよ待った日、二月七日土曜日が来た。急に胸が、わくわくしはじめた。

昼ごはんを食べていても、おちつかなかった。開会式だ、正色のユニホームに、着がえた。

ぼくは、丸善石油（下津）のプラカードを持った。ぼくは、丸善石油会社の選手の方々に、心から「優勝をして下さい」と、はげました。会場内は、自衛隊のすいそう楽が鳴り始まると、会場がしんと静かになり、次々にプラカード持ちの子が、歩き始めた。

だんだんぼくの入場が、近くになるにつれて足がびくびくして、自由に動かないようで、全身がきんちょうして、ロボットのように動き出した感じでした。少し歩きなれたらとても楽しい気分になりました。

たいへんよい思い出となるので喜びで胸が一杯になりました。

（名古屋市立正色小学校）

全日本総合 室内で12月に開催（原則）

6月?に"選抜" 来年度から全国大会修正へ

小委員会案まとまる

3年来の"宿題"となっていた日本協会の全国大会再検討問題がようやく結論を得て、来年度から大きな変動をみることになった。

全日本選手権検討委員会・若崎委員長（日本協会常務理事）が4月6日の常務理事会で発表したもので次の諸点に要約される。

一、斯界最高権威の大会として毎年11月下旬から12月中旬までの間に全日本総合ハンドボール選手権を原則として"室内"で開催する。

一、全日本選抜大会は毎年6月に会期を移し、現在、後援をうけているNHK（日本放送協会）の名を冠した選抜競技会としたい。

一、各種別の全日本選手権大会は毎年11月中旬までに終了させる。

一、新たに一般クラブ（社会人）の全国大会を計画する。

ながいあいだの懸案にようやくメドがついた感じである。

若崎委員長を長とする小委員会（田中秀、田中滋、山田、安藤、鴫田、杉山各常務理事）も、各地方協会や加盟団体はもとより委員間の意見さえ千差万別、その調整に時日がかけられた。

全日本総合選手権については各委員とも、これまでどおり日本ハンドボール界の最高・最強チームを決める大会（ナショナル・チャンピオンシップ）であることに異論はなく、その時期が問題となった。

これまでは8月に最高大会を置きながら、そのあとに国体、全日本学生、全日本選抜、全日本実業団などが行なわれていた。

今回の決定が施行されれば6月から12月までが一応のシーズンにまとめられる。

原則的にとはいえ、全日本総合が"室内"主体になったことも大きなポイントである。

国内から11人制がまったく姿を消したのは昭和38年。以後の7人制の足どりは"室内"が次第にその主体になって来ていた。全日本実業団、全日本教職員は初めから室内であるし、全日本学生も去年から屋外をさけた。

オリンピック、世界選手権など国際的なビッグエベントもすべて室内であり、ハンドボールの室内競技としての色彩はこれでいっそう濃いものになりそうだ。

全日本総合選手権
出場チーム数（小委員会案）

【男子】		【女子】	
前年度優秀	2	前年度優秀	1
全日本学連	5	全日本実連	5
全日本実連	2	全日本学連	2
全日本教連	2	次年度国体開催地代表	1
自衛隊	1		
社会人（仮称）	2	社会人（仮称）	1
高校代表	1	高校代表	1
開催地代表	1	開催地代表	1
計	16	計	12

国体地の持ち廻り無理？

開催地を国体の前年に持ち廻るという慣習も変更されるだろう。

国体ハンドボール競技は原則として屋外であり、11月下旬〜12月中旬ではムリだ。体育館の確保も地方では難しい。当分の間、東京、名古屋、大阪を持ち廻ることになるのではなかろうか。

なお、国体の"リハーサル"としては8月定着を意思表示している全日本教職員選手権が全日本総合に代ることになろう。

小委員会は出場チームについてもその原案を示した。（別表参照）

注目されるのは、男女とも一切推せんチームにした点である。

最強ということにしぼれば当然の成り行きでり、各種別の全日本選手権も「総合」へいちだんと結びつくわけである。

16チーム（男子）というのは現行の数を一気に半減したものだが勇断といえる。

ヨーロッパ各国にならって8強によるリーグという説もあったようだが将来の理想であろう。

高校代表に一つのワクが与えられているが、高体連がどう受けとるか——。

女子の12チームは少ないようにみえるが、最近6年間の全日本総合への出場数をみると22、14、15、16、12となっており順当。次年度国体開催県にワクを設けたのは実情に即したやりかたである。

課題残す"クラブ大会"

男女とも最大の課題はクラブ代表（仮称）の選出だ。

小委員会の説明では来年度全国クラブ大会を開催することを条件にしての発案だが、慎重な準備を望みたい。地域予選を全廃する意向なのでクラブ大会を開かぬと、一般社会人のチームは全日本総合への道を閉ざされてしまうわけだ。

現時点で考えられることは、これまでの全日本総合予選の形式（県予選→ブロック予選）を残しその参加チームを「クラブ」に限定する。さらにブロック予選勝者を集めた大会を新設し、その上位二者を全日本総合へ送りこむのがいちばん手際のよい方法だろう。

NHK杯大会を要望

全日本選抜については発展的解消の意見も一部にはあったようだが、すでに16回の球史を積み有力チームの目標と名誉になっているなどから形を変えて継続。同大会の前身全日本総合室内（昭29〜昭39）時代から後援をうけているNHKの名を全面的に冠した大会（例えば「NHK杯争奪全国選抜ハンドボール大会」）とするようNHKに要望することが申しあわせされた。時期については6月中旬または下旬とし全国大会のふたあけ大会に慣習化する意向だが、全国評議員・理事合同会議ではシーズン開幕直後では出場チームの選考に資料が不足するのではないかという意見が出された。出場チームは男女とも4チームで3日間（リーグ戦）を予定し、毎年選抜委員会を編成して出場チームを選び出すことになろう。

厳格になった審判員審査

新たに更新制（AB級）も設置

審判部

日本協会審判部ではこのほど今年度以降、公認審判員審査に関する規定を一部変更することになりまた本誌既報のように公認審判員の更新制度（A及びB級に適用）を設けることも正式に決めそれぞれ次のように発表した。

審判審査に関する規定

▽審査の回数及び時期

年1回、毎年1月中旬（D級及びD級からC級への上級審査のみ）

▽書類の提出期限

審判手張、申請書を11月1日から11月30日の期間に日本協会審判部へ提出すること（D級及びD級からC級への上級申請のみ）

▽審査料及び認定料

D級千円（審査料なし、認定料一千円）

C級　千円（審・五百円、認・五百円）

B級　千五百円（審・五百円認・千円）

A級　二千円（審・五百円、認・千五百円）

▽各級公認審判員の申請及び審査について

○A級の申請

一、書類は審判手帳、申請書、予備申請書（所定様式・6月30日までに提出）が完備し審査料を納入していること。申請書にはブロック審判部長の推薦書（所定様式）を添付すること。

二、申請に必要な条件はB級を取得してから満2年を経過していること、B級を取得してから50試合以上の審判を担当していること、全日本大会の審判員を経験していること、日本協会主催の公認審判員研修会（年4回）に年1回以上出席していること。

○B級の申請

一、書類は審判手帳、申請書が完備し審査料を納入していること、申請書にはブロック審判部長の推薦書（所定様式）を添付すること。

二、申請に必要な条件はC級を取得してから満2年を経過していること、C級を取得してから30試合以上の審判をしていること、ブロック大会の審判員を経験していること、申請の前の2年間の研修会あるいは講習会に年1回以上出席していること。

○C級の申請

一、書類は審判手帳、申請書が完備し審査料を納入していること。

二、申請に必要な条件はD級を取得してから満1年以上を経過していること、研修会あるいは講習会に年1回以上出席していること。

○D級の申請

一、書類は申請書、写真（3センチ正方形）2枚が完備し認定料を納入していること。

二、申請に必要な条件は満20才以上であること、講習会に1回以上出席していることが望しい

各級の審査については、D級は申請書、C級は審判手帳と申請書によってそれぞれ行なわれるが、A級・B級に関してはこれまでの書類審査では不充分という観点から実技テストなどの方法を採るよう検討中である。

公認審判員更新規定

昭和45年度からA級及びB級について2年に1回「公認」の更新を行なうものとする。更新を行なわない審判員はその資格を失なうことになる。

▽手続き

各都道府県に所属するA級・B級審判員は審判手帳を所属協会に提出し、各都道府県協会がまとめて日本協会に提出する。日本協会審判部は検印（捺印）の上各都道府県協会宛に返送する

▽更新の時期

毎奇数年（昭和45、47、49……年）の12月1日から15日の期間に提出する。

▽更新料

更新の際審判手帳と同時に一人三百円の更新料を納入する。

24、25日に全日本審判員研修

スポーツ傷害の講演も

日本協会では競技規則の統一をはかることと審判技術の向上を目的として今年度の「全日本大会審判員研修会」を5月24、25の両日東京で行なう。

今年度の全日本大会（各選手権）で審判を担当する者は必ずこの研修を受けなければならない。

なお、第1日夜日本青少年総合センター（宿舎）で、問題となっている「スポーツにおける傷害」（講師未定）の講演が行なわれる

主な日程次のとおり

▼第1日（5月24日）分科会（10時～12時）、全体会議（13時～15時）、研修（15時～17時30分）、講演（18時30分～20時）

▼第2日（25日）実技研修（9時～17時・駒沢）

規則研究委員に綿貫氏新任　日本協会審判部ではこのほど同部規則研究委員に綿貫敏彦氏（早大出）が加ったと発表した。

全立教、大崎電気を協会推せん 今年の全日本総合

日本協会は、ことし8月18日から23日まで和歌山県打田町で開く第22回全日本総合選手権の男子出場チームについて次のように発表した。

まず、日本協会推せんチーム（前年度優秀）は、1月の全国理事会で承認のとおり前回優勝の全立教（東京）と同2位の大崎電気（埼玉）の両チーム。

加盟団体の出場ワク（16）は、

▽全日本学連…………9チーム
▽全日本実連…………5チーム
▽全日本教職員連……2チーム

と割りふられ、それぞれの連盟から5月20日までに推せんをうける
なお、全日本実連の5チームのうち一つのワクは自衛隊代表とすることに申し合わされた。

ブロック別のワク（14）は例年どおり左のように決まった。

▽北海道……1▽東北……1
▽関東……2▽北信越……1
▽東海……2▽近畿……2
▽中国……1▽四国……1
▽九州……1▽和歌山県…2

女子は自由参加だが32チーム以上申しこみがあった場合は日本協会が同数以内に選こうする。大会申しこみ〆切日は男女とも7月15日の予定。

今秋の国際試合を断念

日本協会は今秋に予定したヨーロッパ強豪チームを迎えての国際試合を中止することに決めた。

4月6日の常務理事会で話し合われた結果によるもので、その理由として日本協会が来日を希望した今年の世界選手権上位国がいずれも日本側の示す「往復旅費（航空料）は来征者負担」という条件を今シーズンはとうてい満たせないとしたことがあげられている。

頂点強化に国際交流はかかせないものであり「全額負担しても招待を実現すべきだ」という声もあったが一千万円近い資金確保の裏付けがなく断念、上位国（1〜9位）以外の国（例えばフランス、アメリカ）も候補にあげられたが「強化の対象にならない」ということで見送られた。

また、女子についても検討されたが来日の意思を示しているのはボヘミアンズ（チェコ）などほとんどクラブチームであり、しかも少なくとも片道の航空料金は負担しなければならぬという条件面の問題もあって断った。

各国は前年の間に翌年度の詳細なスケデュールを組むこともあり、また、彼我のシーズンの違いなどということもあるので、招待には前にもまして、早い時期に詳細な接触をもつことが必要である。二年以上先を見通したスケデュール作りが望まれるところである。

安藤氏ら37人 体協1級トレーナー

日本体育協会ではこのほど昭和41年1月の第1回講習会から今年1月までの間にスポーツトレーナーのライセンス（資格）を修得した者の名簿（1級四七七、2級二五二二人）を発表した。

ハンドボール関係の1級トレーナーは次のみなさん。

【競技団体推せんによる者】安藤純光、高橋健夫、中野偉夫、藤田信義、砂長誠、渡辺慶寿。

【都道府県推せんによる者】斎藤浩（青森）、太田利彦、加藤祈也（岩手）、福島富造（宮城）、住谷稔、柏葉義昭（茨城）、細井操（栃木）、佐分正典、後藤幸正（神奈川）、青木崇（長野）、金原至（富山）、若山博（石川）、高林淳誠（福井）、渋谷行康、鈴木城、片瀬喜代次（静岡）、中根武彦（三重）、石野誠（岐阜）、田村耕造（滋賀）、中西禊（奈良）、川口譲（和歌山）、高木敏行（鳥取）、猪原昭、坂手卓資（岡山）、平田幸男、片岡賢二（広島）、松高茂樹（高知）、中西敬一、今村孝一（福岡）、島田秀四（熊本）、蒲山尚志（鹿児島）。

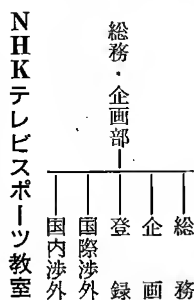
普及部が復活 部長に若崎氏

日本協会では4月26日の全国評議員・理事合同会議で、本部機構の一部改正を決めた。

それによると、技術指導部の新設でこれまでの技術部を廃し、底辺活動を主体とした普及部を復活することになった。普及部長には若崎常務理事（前技術部長）が就任。

総務企画部に5専門委

総務企画部は分掌事項の拡大などのため五つの専門委員会を設けることになった。総務企画部担当の常務理事はこれまでどおり杉山（部長）、渡辺、嶋田、田中滋の4氏だが専門委員長には近く若手を起用する。



NHKテレビスポーツ教室 5月24・31日にハンドボール

NHKテレビスポーツ教室の「ハンドボール」編は、例年の秋季から今年度は上半期に移され、5月24、31日の2回に分けて午前9時から1時間、教育テレビで放映される予定。指導は北川勇喜氏（日体大監督、日本協会選手強化対策委員）、実技は日体大が担当する。

座談会

世界選手権より帰りて

～世界10位の自信と今後～

出席者

全日本監督　村田　弘（日本協会オリンピック対策部長）
コーチ兼選手　竹野　奉昭（FP・大崎電気）
選手　飯田　誠行（FP・大崎電気）
選手　本田　洋（GK・日体大4年）
聞き手　勝　繁夫（日本協会技術指導部長）
藤本　強（本誌編集長）

藤本　世界選手権の後の転戦・帰国そして国内サーキット（帰国報告試合）とお疲れがまだ残っていられると思いますが〝世界10位〟のつぶさな情況と、今後の課題についてお話願いたいと思います。まず、世界選手権にどういう状態と申しますか気持ちで臨まれたかからお話下さい

村田　「ベストエイト」これが我々の目標でもあり、全国の皆さんの期待でもあったわけで、私どもも国内における強化などすべてをこの点にしぼっていました。本番が近づくにつれ、予選リーグB組で「2勝をあげる」という具体的なモノになってきたのです。

勝　前回優勝のチェコ、前回7位で今回は屈指の優勝候補ユーゴにはさまれた日本の組は、今大会の予選各組の中でもA組（注・東ドイツ、スウェーデン、ソビエト、ノルウェー）とともに最激戦グループだったわけですね。

村田　日本としては一つはちゃんと予定がついていたのですが……

藤本　アメリカですね

村田　そうです。ですからあと一つとればいい。チェコ、ユーゴのうちとなれば今までの対戦経験からユーゴということになる。

竹野　チェコ戦を投げるという意味ではなくて——

村田　リーグ戦ですからもちろんユーゴ戦同ように チェコ戦にも臨むのですが、ウエイトの点でね…。

藤本　引き分けという結果はちょっと予想できませんでしたしね

竹野　考えていないことですよ

勝　チェコに食いさがって、ユーゴ、アメリカから二勝という線は、今回の場合誰もが立てる算段でしょう。

藤本　チームはどのような状態（コンディション）でフランス入りしたのですか

勝　デンマーク、西ドイツでの前哨戦がスコアの上でさっぱりしていなかった感じがあり心配してたのですよ

村田　デンマークが思っていたより強行日程だった。当初2試合の予定が3試合になったうえ、それが移動（旅行）日をともなったものなのです。

竹野　船にまで乗せられ、デンマークのすみからすみまで動いた。吹雪にあい汽車が立往生したこともあるし—。

村田　デンマークで少し疲れが出ました。それと、話がとびますがユーゴ戦の前夜に泊ったアジエンのホテルの暖房が利かず睡眠不足だった。この2回の調整上の狂いは大きくひびきました。

竹野　アジエンの時は壁がうすくて熱気がたまらなかったのです。

村田　デンマークの場合、日程的にはそう悪いプランではないのだが、こちらの思うとおりにはいかないという点でやっぱり……

藤本　日本を発った直後ですしね

勝　時差も関係してくる。

竹野　西ドイツでも、結局クラブチームの日程に合わせるため、こちらにとっては苦しいスケジュールになる。あれがナショナルならそうでもないのでしょうが。

村田　本大会前に外国チームと手合せして乗りこむことは日本の場合、絶対必要です。前哨戦については今後もっともっと慎重に考えて余裕のある日程をとりたいと思います。

藤本　デンマークでの3試合は、国内にいては考えられないような7MTのとられかたでしたね

本田　11、11、8と合わせて30本とられたのです。

藤本　異常とも思えるのですがね。この数は。

本田　レセプションの時、審判に聞いたらポストプレーのつぶしかたの拙さ、カットの仕方が悪いからだといってました。

勝　デンマークの力はそう恐しいという感じはうけないでしょう。

本田　サイドの使いかたとポストプレーが実に巧妙です。

村田　コンディション的にはデンマークでの3戦は苦しかったが、技術的にはポストプレー対策という面で実に有意義だった。ここで、ヨーロッパの長身者によるトリッキーなプレーを含んだポスト攻撃にぶっかったことが、つまり本大会でどれだけ役立ったか判りません。

日本の手の内を偵察…チェコ

藤本　世界選手権前の状態はよく判りました。それでは本大会の模様を順を追ってお話しいただきましょうか。

勝　第一戦のニュースが入った時、私と藤本さんと安藤さん（純光氏、審判部長）とちょうどいっしょに協会に居て9—19というのはこのあと苦しいなあ、といっ

てたのですがね

村田　チェコも緒戦だし、しかも力をあげている日本ということで相当慎重に出て来ました。

２月22日に、日本が西ドイツのブラッシュバイクで地元クラブと対戦した時、チェコのトレーナー・ケニッヒ氏と例のマレス選手が偵察に来てつぶさに日本チームを観察していたのですよ。かなり日本戦法というものへの対策を仕入れて帰ったようです。

竹野　こっちも野田を休ませるなどしたのですが…。

本田　チェコは日本を知ってました。それにしきりとメンバーチェンジをして来てこちらが一応相手の攻めかたなど判ったと思うと、メンバーが変ってまったく別な型をとって来るのです。

飯田　日本の手の内はたしかにみられていましたよ。

竹野　偵察を送りこむなど日本への気のつかいようは、それだけの効果をあげたのです。彼らは。

村田　２―４まではよかった。入れなきゃいかんヤツを３本ぐらい落とした。しかも連続だった。あれが入っていれば勝機さえあったように思う。

勝　どうも日本は名の売れた選手権大会になると緒戦では実力以下のことをやるようですね。タシマイダン杯（注・44年６月27日～７月５日・ユーゴ）の時の第一戦（ソビエト戦）もそうだった。

飯田　それではいけないと思っていても雰囲気にのまれてしまうのではないでしょうか

村田　いずれにせよ前半の２―８は拙すぎた。最低５点はとれただろう。チェコも一度絶対のチャンスを逃していたし…

竹野　５―９ぐらいのスコアではなかったかなァ。順当なら。

藤本　終盤15分間に猛反撃をしたと伝えられているのですが、これは雰囲気になれたからですか、それともチェコがメンバーでも落としたのですか

竹野　最後まで相手はベストメンバーですよ

飯田　しきりにメンバーチェンジはしましたがこれは始めからでしたし。

藤本　チェコの印象は？

本田　反転動作が速いことに目を見はらされました。攻撃から守備、守備から攻撃といったプレーでの反転も早い。メンバー交代などの出入りにもそれがいえる。

飯田　メンバーが代ってもちょっとの乱れも見られないのはすばらしいですね。

本田　プレーそのものはきれいとはいえません。フリースローの時、うしろからひっかけたり。

竹野　マレスが相変らず巧い。

勝　もういい年でしょう。

村田　33才ですね。この試合が公式国際試合の百九試合目ですよ、たしか。

竹野　むこうでいう国際試合出場数というのはナショナルプレィヤーとして相手の代表（ナショナル）と対戦した時だけ数えるのですからこれは大変なことです

藤本　今度の大会で百試合以上の国際経験を持っているといったらマレスのほかルブキング（28才西ドイツ）、モルテンセン（34才デンマーク）ぐらいでしょう。

村田　マレスの好リードというものがチェコの軸になっているのは相変らずです。例えばＧＫが球をもった時、マレスはすでに日本のフリースローラインまで走りこんで来て、そこから攻撃展開が始まる。

竹野　前半はサイドからの失点が多かった。

村田　速攻からやられたというのはあまりない。

飯田　マレスのサイドでの動きというのは本当に巧いですね。

本田　それとマレスのプレーは実に切れ味がいいです。前半、いきなり彼が右サイドから反対側の45度あたりへ廻りこんでしかもその角度のフリースローライン上からミドルシュートを射って来たのには驚きました。あのプレーで３点連続とられたのが結果的にもひびいたと思います

飯田　日本が点をとれなかった一つの原因にチェコのＧＫの美技があります。

藤本　アーノストですね。

本田　そうです。特に前半はまともなシュートをすべてとめられたといってよい。野田さんがフリースローからひょろっと体で流したのと、木野さんのシュートがマレスの手に当って逆をついたのだけなのですから。ゴールは。

竹野　どうもチェコには今もって心の底に苦手意識がありますね

村田　ソビエトとチェコにはたしかにある

勝　それをどう払いのけるかが課題だね

竹野　第４回大会（昭36）で会った時10―38でした。これは日本の世界選手権参加第一戦なのですよ。このほか20―37（昭36）、７―40（昭39）とやられている。

藤本　こちらのメンバーが代っているといってもそういうものは不思議に残る。

村田　日本がユーゴに自信があるというのは逆の作用をしているわけですよ

勝　練習試合でもたたかなければいけ

世界選手権 日本の成績

▽予選リーグＢ組

チェコ	19	8―2 / 11―7	9	日本
日本	17	8―10 / 9―7	17	ユーゴ
日本	21	10―7 / 11―8	15	アメリカ

①チェコ３勝②ユーゴ・日本１勝１敗１分（得失点差でユーゴが決勝トーナメントへ進出）③アメリカ３敗

▽9～12位決定リーグ戦

日本	20	12―9 / 8―10	19	アイスランド
日本	22	13―7 / 9―6	13	フランス
ソビエト	28	11―6 / 17―6	12	日本

⑨ソビエト⑩日本⑪アイスランド⑫フランス

日本チーム記録（３勝１分２敗）		
	総得点	101
	総失点	111
	１試合平均得点	16.8
	同失点	18.5
	総シュート数	233
	得点率	0.433
	被シュート数	197
	失点率	0.564

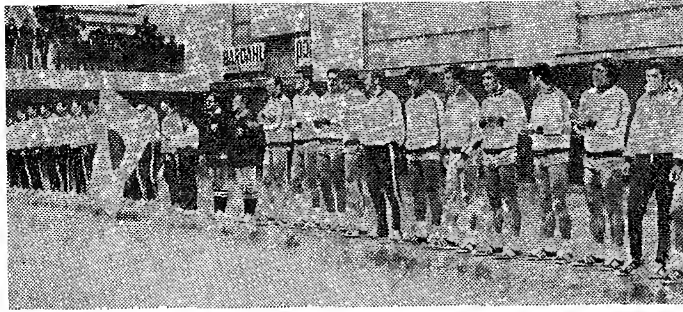
（本誌調べ）

ないというのはそうした意味があるわけですね。国際試合の微妙な心理ですよ。

竹野　第5回（昭39）と第6回（昭42）でノルウェーにはもう絶対。去年、ユーゴとハンガリーに自信ができた。今年でフランス、アイスランド、アメリカには平気だという気持ちが日本選手には植えつけられたと思っている。そうやって一つづつ日本の〝お得意様〟をつくっていかなければいけない。

藤本　上位進出の一つの要素ではあるね。

竹野　もっとも3年ごとの大会に一つづつやっていくのでは優勝までに何年かかるやら―(笑)



（写真）日本―ユーゴ戦。試合前の選手紹介風景（2月28日・アジエン）

なだれこむタイプに弱い

村田　結局チェコ戦の反省は2―4、2―5、2―6と開かれていった間何回かのノーマークを落としたことにあるのですが日本がこの国を苦手とするということを分析してみると、その〝型〟というものにぶっかると思うのです。

　つまりチェコやソビエトというのはいわゆるゴールに向かってなだれこんで来るタイプなのですね。こういうのに日本は弱いのですよ。一つまちがうと相手の波の急襲をささえ切れずに大敗を喫する

勝　これでもか、これでもかという感じの相手だ。

本田　最後までそうした力を注ぎこめるというのはやはり相手の精神力の強さといではないですか。

村田　ルーマニアなどと対戦していると勝てないまでも、差はなんとなくないのではないかという気持ちになれるが、チェコやソビエトというのはどうしてもそうなれない。

竹野　さっきいったように日本はこれまでチェコと3回当っていずれも大差の負けでしょう。それが10点内に留ったのだし村田監督がいわれたように前半5点はとれていたから一応かなりの差にまで追いつめては来ていると思いますよ。

村田　あの試合で飯田君がノーポイントだったよね

飯田　コースを読まれたと思うのですよ。ディフェンスが実に巧い。ディフェンスの型みたいなものに誘われていつも同じコースで射たされ、それを全部やられた

竹野　そういう点、彼らの観察力・偵察力はするどいのです

本田　日本はチェコのことを知らないのにチェコはわれわれのことを知ってましたね。後半になって日本はようやく相手の動きが判って来たですね。

村田　45度からジャンプして来た時、ボールを腰のあたりにかくして射ってくるポイントを判らなくするプレーがありましたね。あれにはまったく驚いた。

竹野　ボールをわしずかみに出来ることと滞空時間が長いからできるプレーだよ。

本田　余談になりますがハンガリーのマロシとマレスは実によく似ていますね。兄弟みたいだ。

飯田　体つきから頭の毛のハゲ具合まで、体格のほかプレー動作まで似ているでしょう。

藤本　マロシというのは大活躍のようでしたね。むこうの新聞みてるとチェコの試合にはマレス、ハンガリーの試合にはマロシがきまって見出しになっていた。それではこのへんでユーゴ戦にお話を移して下さい。

ユーゴ戦立ちあがりに乱調

村田　「やらないかん」という意識がチェコ戦を終ったあとから全員にみなぎっていました。第一戦が9―19という結果だっただけにいっそうそういう気持ちがはりつめていたのですが、まったく残念だったのははじめにお話したようにアジエン（試合地）で泊ったホテルの暖房がきかなくてコンディションに狂いが生じたことです。

竹野　立ちあがりは攻防ともにチグハグだった

村田　特にタシマイダン杯での自信で「いける」という気持ちがあり、得点を意識して守りがお留守になったのは拙かったです。5分で1―5でしたか、

本田　ポストプレーからよくとられた。

村田　守りの組織の乱れですね。

竹野　木野君のシュートがカットされて相手のボールになって攻めこまれたのですが、その時飯田君がレフェリーと重ってそのスキに射たれるなどというちょっと考えられぬようなプレーもありましたし

飯田　たしかに立ちあがりは「やらねば」という気ばかり先走って身体が動かなかったですよ。

本田　野田さんがすばらしい速攻から得点したのをキッカケに盛り返しましたね。あのプレーでだいぶペースが戻った。

飯田　失点してはいましたけれど、リードされているという焦りは少しもなかったのですよ。いつか詰まるという余裕があって全然慌てなかった。そこへ野田君のプレーが出たからあとはどっと――。

村田　1―5から7―7に追いつめたわけですが、この間というものはつまり6―2なのですよ。完全に日本が勢いづいた

勝　それだけに立ちあがりもう少しなんとかできればよかった。惜しいなァ。

竹野　それともうひとつ7―7とタイになってホッとしたというか気持ちがちょっとゆるんだ。

飯田　それはありました。

本田　ユーゴは完全に慌ててましたね。この試合では例の「ユーゴ三角形」（3・

2・1シフト）というディフェンス陣形をとらず一線でしたが、そこを木野さんがステップでついたし、サイドからノーマークのポストへ球はよく通ったし。GKは完全に落ち着きを失ってウロウロしていたのですから、あそこで一気に押しこめればねェ…。

藤本　「3・2・1」は使わず？

竹野　終盤だけちょっとね。

村田　押し気味にいきながら引きはなせなかったのは一回も先行できなかった点にあるのですよ。タイのあとリードするチャンスは5回ほどあった。同点にするたびに「やれやれ」というわけではないのですが、なにか精いっぱいという感じでした。そのうちにGKのでかいのに代えられて――、アルスラナジクといって1m89、94Kある・これに5本のノーマークをやられた。特にそのうち1本重要な時に落した。

竹野　すべていけるやつを落したのですから悔やまれます。

藤本　タシマイダン杯の時には追いかけられた、今回は追っかけたわけでしょう。

飯田　リードされても恐くはなかったですよ。いつでもいけるという準備というか気分は全員にあったから。でも決めるべき時に失敗してしまった――。

本田　不思議に思ったのは17―17のあと1分30秒ぐらい残ってユーゴのボールだったのですよ。ところが彼らいっこうに射って来ない。日本ならラストチャンスを狙って慎重に攻めこんだあと〝決勝の1点〟を狙うのですがそれがない。ましてや彼らは強力なシューターが多勢いるのですから。どうして攻めて来なかったか判らないですよ。

飯田　引き分けということを意識してたと思います。ユーゴにとってラストチャンスをもし落として逆撃されたらという気になったのでしょう。あの場合、日本のムードの方がずっとよかったから、ムリしたら負けることになりかねない。

竹野　相手の攻撃は後半ほとんど見るべきものはありませんでした。

村田　後半は完全に日本のペース、ちょっとのところ気を抜いてポストに入れられて、それを引っかけたために7MTをとられたりしただけだ。

竹野　気を抜いたというより、パッと来るプレーにやられた。それだけやはり巧い

引き分け策戦のユーゴ

藤本　ユーゴが引き分けを狙ったということはたしかにあるでしょう。

勝　前日のアメリカ戦で26点の貯金があるからねェ

竹野　劣勢だっただけによけいムリをしない負けるより引き分けを狙って来ますよ

飯田　コーチが立ってしきりに指図していましたからね。時間の経過を教えているのではなく明きらかに得点計算を教えていましたよ。

勝　タシマイダン杯の時、下里君の好守が大きな勝因になって、彼の活躍がヨーロッパの関係者やジャーナリズムに〝時の人〟的に騒がれたけれど、GKは誰でスタートしたの

村田　下里君で出て途中から本田君。ユーゴに対して「シモザト」の名の威圧を狙ったわけですよ。

竹野　下里君は立ちあがり今度は7MTを入れられてしまった。（注・タシマイダン杯のユーゴ戦で下里は7本の7MTを防いで大きな話題になった）

本田　あの立ちあがりは、チームのリズムがあまりにも悪すぎました。ディフェンスのリズムによってGKというものもずいぶん影響されて来ますからね。速攻が入り出してから攻守ともにリズムがよくとれて来たのですけど、今回の遠征は非常にこうしたことが多かったような気がします。

勝　ポイントされたのはどういう所から

本田　45度と45度の間、つまり中央がやはり多かった気がします

村田　その地域の更にゴールの巾部分といえると思う。

本田　サイドからはあまりありませんでした。右サイドから3本のうち2本とられただけで左サイドは1本もなかったハズですポストプレーは案外止めていました

竹野　これはなんといってもデンマークでの経験がモノを云いましたよ

村田　30本の7MTをとられたものの、ともかくヨーロッパチーム独得のポストになれ、対策をこうじられた点でデンマークに立ち寄ったことは大きいです

飯田　いくら去年ヨーロッパに行って判って帰ったといっても、彼らと始終対戦していなければ感覚がうすれて来てしまうわけですよ。

本田　その通りですね。

竹野　本田君にしても、シュートに対する詰めが試合ごとによくなったもの。デンマークの時はゴールにつきすぎてポカポカ入れられた。

勝　日本の得点は？

飯田　やはり両方の45度ですよ。

本田　木野さんと飯田さんのリズムが会った時がよいですね。

村田　あの試合は近藤君が不調だった。8本射ってゼロなんていうことはちょっと今までの彼には考えられません。体力的にへばりが出ていたのかもしれませんが人間にはやはり波というか体調の上下の線があって、彼のもっとも悪い日に当ってしまったのでしょう。彼にとっても日本にとってもこれはアンラッキーでした

藤本　ユーゴの調子はどうごらんになりましたか

村田　タシマイダン杯の敗戦、さらにこの試合でも1―5から追いつかれた負い目が重ってオドオドしているようだった

竹野　終ってからも、やりにくい、としきりにいっていたほどです。始めからなにかそうした心理が強かったのでしょうね

村田　翌日のチェコ戦なんかイキイキとしてましたよ。

飯田　日本戦からは考えられないほどの動きなのです。

本田　日本がカモっていたGKもチェコのシュートを実に巧くさばいてマレスはたしかこの日ノーポイントにおさえられたハズです

竹野　固くなっていたことは確かです。

藤本　ザグメスターはどうでした。彼はタシマイダン杯の時は出ていなかったわけで、今回は彼の力だけプラスされた、と

かなりマークしてたわけなのですが

村田　卒直にいって警戒していたほどではなかった。ちよっと我ままな感じですよ

竹野　一人でプレーしてる。みんなと合ってないようです

本田　応用力があまりないように見たのですけれど――

村田　チームプレーにとけこめず、好き本位にやってそれで得点している。ですから7MTなんか与えたらこれはすごい。

勝　タシマイダン杯の時、出場停止処分をくっていたというのも、そうした性格のためでしょうかね

村田　たぶんそうでしょう。しかし1m91 88Kというい体だしチェコが二人がかりでマークしていたのを振り払ってシュートを決めたりする所はすごいと思いました。左腕といわれていたが右利きです

飯田　目の前からランニングシュートして来て、頭の上をスーツと飛んでいく。パワーはさすがです。

藤本　彼は第5回大会のあと西ドイツに移って西ドイツのゾーリンゲン・SV・98に入り、それからユーゴに再び戻っている選手です。だから前回は姿を見せていません。ほかに目立った選手は？

竹野　あまりいない。

藤本　強気ですね（笑）

飯田　サージヤントのすばらしいのが居たでしよう

村田　ポツラヤクかな。

藤本　日本がチェコ戦の時、はなれた場所でアメリカと対戦しているユーゴを偵察に誰か派遣しようというプランがありましたね。

村田　結局行かすことができませんでした

竹野　ホテルがとれなかったことも一因ですけれど――。

大量点を狙つて拙戦

（対アメリカ）

藤本　さて、第2日を終ってチェコが2勝でトップ。ユーゴが1勝1分で得失点差はプラス26、日本が1勝1分でマイナス10。アメリカ戦を前にこの得点計算はしきりだったと思うのですが。

村田　そうですね。ユーゴとの開きが36あった。数字的には可能な面が残されていても「無理だ」という気が根には誰もあったと思う。

竹野　しかもユーゴがチェコに勝ってしまえばそれまでですからね

藤本　チェコ―ユーゴ戦が日本―アメリカ戦の前ならまだしも、日本が先というのもこの場合いろいろな作用をしますね

竹野　ともかく考えられるのは、ユーゴが負けることを設定してユーゴとの差をゼロにしておくということだけなのですよといっても、国内の試合でも、仮に高校生相手でも36点差というのはなかなかつくものじやない。

村田　大量点というのは狙って出来ることではありません。しかし狙わねばいけないという気持ちでスタートしたのです。

飯田　僕らとしてみれば、そういう気があるから早くポイントしよう、しようと思う。その気持ちが変に落ち着きをなくしてしまう。

本田　それにユーゴ戦に引き分けてガックりしてたこともあるし、快調とはいい難い状態にあったわけです。

飯田　廻せばいいものを早く射ったり、無理して射ったりする。36点差というのは相手もゼロというわけにはいかないからつまりは40―4とか42―6とかなるわけで、1点とられればいつもよりぐっと響いてくるのです。そんな焦りが全員どうしてもあった。野田君なんか「どんなことがあっても」という斗志が先立っからパッと行って一人でパカッと射ってしまう。

村田　アメリカだからそういう無暴なこともできたが、他の国なら危かったよ。

竹野　ユーゴ戦を休んだ連中の方が好調だった。斎藤君なんかロングがピシピシ決まるし。

勝　アメリカはどんなチーム？、黒人もいましたか。

竹野　やはりバスケットボール的ですね。黒人も一人か二人。サージャントからパスしたり。

本田　ピボットからのパスプレーなんかバスケットボールのテクニックを巧くつかってますよ。

村田　GKは経験があるだろう。

竹野　そういえばよい動きを見せてました

村田　スピードもなく、ゆったりとしたいやな攻めでね。

飯田　だからいっそう日本はいら立つのですよ

本田　プレーもきたないですね。

村田　じっくりやったら21―15などという拙戦はまずない。20点近くの差はつけられたと思う。やはり、チェコ戦での9―19という点差がアメリカ戦にしわ寄せられた感じで、世界選手権のベストエイト入りというのは2勝でも安心できないということですね。

藤本　日本がユーゴとアメリカに勝って2勝1敗になっても、ユーゴがチェコに勝てば三者同率になるわけですし、その場合は得失点差がカギになる。ユーゴが日本に負けた場合、チェコはユーゴ戦に気を抜くのではといった憶測さえあったのですが。

村田　なんともいえないですね。

竹野　アメリカはユーゴに8―34、チェコ

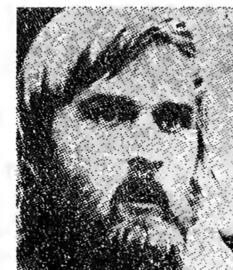
話題の3選手



得点王のマキシモフ（ソビエト）



日本を苦しめたベテラン・マレス（チェコ）



正統？ヒッピーのニールセン（デンマーク）

出席者



村田　監督



竹野コーチ兼選手



飯田　選手



本田　選手

に9—23と連敗したあと、日本に6点差は上出来だと大喜びのようでした。

日本は4強入りも望めた

藤本　ベストエイト入りを逸したのは惜しみてもあまりあるのですが、さらに残念なのはB組で2位になった時の決勝トーナメントの1回戦（＝準々決勝）はハンガリーが相手だったのですね。

村田　そうですよ。ここは去年の夏、24—23、20—31、21—21（分）でしたし、第6回（昭42）の時は25—30。勝てない相手じゃない。そうすればベストフォアですよ。選手も考えまいとしてもどうしてもそのことになってしまう。

勝　まったくですね。

藤本　惜しいですよ。そうなれば今ごろ大変だ。

村田　予選リーグを通じて日本のディフェンスははっきりと向上のあとを示しました。選手たちは本当によくやってくれたと思います。

得点では47と前回（注・68）より低いのですが、これは全般的にというか、世界的にディフェンスが強化されていることを示しています。

例えばA組など最高の点のとりあいが東ドイツ—ソビエトの13—11で、あとは10—9、10—8、11—9、なんと8—6というのもあるといった具合です。

竹野　今や一試合20点というのは大量点でしょう

飯田　20点台のゲームは少なくなりましたね。

藤本　A組は一つもなし、B組が各国ともアメリカから20点以上とっただけ、C組はルーマニアがスイスから22点、D組には3試合ありますね。

勝　少いですよ。やはり。

竹野　20点以上とられる国は相当弱いといってしまってよいのです。

藤本　9位決定リーグにソビエトが落ちて来たのは意外でしたね。

村田　この大会の大きなトピックです。あとは各組とも一応順調です。

竹野　B組を除いてはね（笑）

村田　ソビエトが敗れたといってもスウェーデンの力はやはり買っていいですよ。すっかりメンバーが若返り、それが成功しました。

竹野　スウェーデンは大きいです。

村田　平均身長一八七・二、平均体重八二・七。どちらも参加国1位ですよ。私はミュンヘンの金メダル候補だと思います

藤本　それにしてもA組はすごかったですね

村田　4位のノルウェーでさえスウェーデンと東ドイツに2点差、ソビエトに1点差ですから。前回、前々回に日本が勝ったような力とは比べられません。伸びてます。

竹野　若返りの話がでましたが、その逆にチェコはベテランが多く、それが連続優勝できなかった一因に思えます。

村田　決勝トーナメントに入ってというより予選リーグの時感じたのですが、有力国はいずれもベストフォア入りに目標をおいて試合を進めてますよ。それだけ余裕があるわけで、一戦々々必死のわれわれとはかなり差がある。

竹野　ルーマニアがC組の最終戦で西ドイツに14—15で敗れたのも偶然ではないでしょう。C組1位はトーナメントでA組2位にぶっかる。会場こそ違えA組の2位が東ドイツになることは試合時間の関係などで自分たちの試合前に判っていたでしょう東ドイツをさける〝工作〟はできるわけです。この推測が当っているかどうかは別としてそういうかけ引きが随所に感じられる。

村田　B組の全日程が終った時、チェコのケーニッヒトレーナーが私の所へ来て「準々決勝のデンマーク戦は苦しい。デンマークはわれわれとの試合に備えて予選最終戦に主力3人を休ませている」というのです。

藤本　そうですね。それでデンマークはハンガリーにD組の1位をゆずっている。

村田　ケーニッヒ氏の心配どおりチェコはデンマークに16—18でやられてしまいました。とにかくベストエイト各国はベストフォアへの進出にすべての力を注いでいる。そのためには予選で主力を欠場させる冒険をあえてやるのです。それだけに準々決勝の4カードは壮絶な激戦で1点差が2試合、2点差が2試合。東西ドイツの対戦は再延長にもつれこんで、結局、予選リーグ各組の1位は枕を並べて準々決勝で負けてしまったのです。

楽だったフランス、アイスランド戦

藤本　9～12位決定リーグというのは世界選手権史上初めての試みですが各国の表情はどうだったですか

竹野　ソビエトはここで負けたら大問題だとせっぱ詰まった感じ。フランスは地元・開催国というメンツ、アイスランドは国でもっとも人気のある競技がハンドボール……といったようにそれぞれ大きな背景があり、ベストエイトからの落伍者のリーグとは思えぬほど緊張していましたね。

村田　気の毒だったのはフランスで、まさかこのリーグの第一戦でソビエトと当るとは思ってもいなかったでしょう。奮起したソビエトの猛攻の前に14—25と敗退してしまった。これですっかりフランスは元気をなくしたようです。

飯田　地元だけにどうしても9位に入りたかったわけですからね。しかもパリでね。

本田　気の毒みたいでしたね。

村田　地元の報道関係もフランスの敗退で

だんだん取り扱うスペースが小さくなっていった。

飯田　日本―フランス戦なんかほとんど出ていない。

勝　日本とアイスランドはどうでした？

飯田　一言で云えば楽勝ペース。

村田　初対戦という不安だけでしたね。心配な点は。

本田　やはり何をやられるかといったことは気になりますよ。

村田　むこうは日本なんかという気がある

それに宿舎からすごく遠い。

飯田　バスに2時間近く乗っていて、丘をこえて町がみえる。ここかなと思うとその先という具合で、丘を三つもこした。

本田　ゆられて着いて1時間足たぬうちに試合開始でした。

村田　実力的には決して弱い相手ではありませんよ。終盤サキが見えたのでメンバーを代えたらそのスキに猛迫された。

本田　下手すれば引き分けるところでした

日本はちょっとしたことでコンビが悪くなってしまう。

竹野　そこらあたりが日本チームのミステリアスな点ですね。それも連続ゴールを許してしまう。

藤本　大型な選手がいるそうですね。

竹野　右と左それぞれ一人づつ。一九八と一九六かな。一九八のほうは20才ですよ大きいから動きがちよっと悪い。それでもトロトロしているかと思うとパッと射つ。

本田　あの二人は翌日のソビエト戦に出ていないのですねスタンドで観ているのでどうしたんだと聞いたら『出られない』なんていってた。

村田　日本との時も、比較的小さいのでスタートして来た。

藤本　フランス戦は？

村田　フランスに元気がなさすぎました。でも強化したらやはり体力もあり悔れない国の一つですね。現在は日本とフランスの〝ナショナル〟の差が感じられますよ。

飯田　ソビエトに叩かれたのがひびいていたようですし。

本田　ポストに投げこむプレーぐらいしか能がないチームでした。

飯田　選手一人々々もそう目立たない。一人だけ足首を痛めた選手がいたでしょう

村田　ステラのリラルジェ。これは新鋭で動きがいい。

本田　フランス戦快勝の一因には近藤さんがアイスランド戦を休んでフランス―ソビエト戦を見に行ったこともあると思います。

飯田　よかったですね。すばらしいデータをこさえて来てくれた。ディフェンスが開いてボールをかなりつぶしにとび出してくるからフェイントで抜こうなんていうアドバイスは大きかった。

村田　偵察というものの意味を痛切に感じましたよ。こういう大会にはそれだけの余裕のもてるスタッフで参加する必要がありますフランス側も日本のアイスランド戦をヴィデオに撮って研究したらしい

崩れをみせないソビエト

勝　ソビエト戦。やはりソビエトには分（ぶ）が悪いですか。

村田　なんかねェ、何日たってもユーゴ戦の引き分けが心のスミに残っていて。アイスランド、フランス戦はやらねばというチームワークで乗り切って来たが、ここに来てさすがにへばりが見える。8日間6試合、それも移動を含んででしょう正直いって苦しかったです。でもスタートは実に好調で2―0とリードした。それが逆転されたらもういけない。いちどにガックリきた。惨めなくらいだった。日本選手なんてこんなことしかできないのかと思うほど凡プレーがつづいてしまったのです。木野君がこんなミスをと思うようなことをやるし。

竹野　弁解にしかなりませんが、やはり疲労の頂点ですし、ずっとつづいた緊張の糸が切れてしまったのです。

藤本　ましてや「ソビエト」という苦手意識があるし。

村田　タシマイダン杯の時は緒戦でしょう調子がもうひとつでていない時でした。今度は疲れの重った最終戦、条件の悪さがソビエト戦にはついて廻ってます

竹野　ソビエトには過去10―40（昭36）、13―30（昭44）ですからねェ。

本田　若手のパリパリに思い切りやられたと思います。

竹野　マキシモフが光ってましたね。射っと思うとバックパスで流したり。

本田　訓れんされているチームという感じがいちばんします。ソビエトは。

村田　チェコ戦の話の時にも云いましたがなだれこんでくるチームに弱いという面が出てしまいました。

　なだれこまれると小さい日本は不利ですよ。早く詰めれば中へ入れられるし。

竹野　ディフェンスのやりかたを変える必要がありますよ。

飯田　国によって応変させるべきでしょうね。攻める面にしても相手のディフェンスはゴールエリアにへばりついているようだが、シュートをしようとするととびあがる前につぶしてくる。

本田　ディフェンスにおける積極さというものは11人制時代の方がよかったということを先輩のかたから聞いたことがありますが

藤本　守っている者の責任感は11人制の時の方が強かったでしょう。

村田　日本の守りは小じんまりまとって来たが、今後はいわゆる攻撃的な守りを身につける必要があるでしょう。

竹野　現在のは受けの守りですからね。それに一発止めたあとのさがりが悪い。

村田　この試合ではマキシモフに中井をピッタリつけさせて、彼の動きは完全にとめたのですが、そのあと、つまり残りの5対5で結局崩されちやう。

　江名君がじんましんでフランス戦につづいて欠場したうえ、野田君が始ってすぐ大腿部の打撲で退場した、日本はまったくいいところなしでした。

飯田　僕が一本サイドからプロンジョンを決めましたよ

竹野　あれはよかった（笑）

本田　ソビエトの強さというのは一定した技術を最後まで崩せずプレーできるということにつきると思うのですが。これは精神的体力的、なものでしょう。

飯田　それにしてもソビエトが9位とは、考えられません。

執念のみなぎる8強の激突

藤本　決勝戦の印象はどうでしたか。
村田　3年に1度の爆発という一言につきるでしょうね。スポーツというものは技術よりも精神力だということにしめくくれるとも思ったですね。ルーマニアの優勝は順当で、昨夏とは比べものにならぬほどまとまっていました。
竹野　場内も興奮してますし、なんか圧倒されるものがある。
本田　異様なムードでスタートしましたね
竹野　東ドイツはかなりリラックスしてた序盤をみていてこれは初優勝だと想ったのですけど――。
本田　ルーマニアはもうひとつアカ抜けがしませんけどやっぱり強い。
竹野　東ドイツは西ドイツの教科書的で流れいなハンドボールにたくましさ、力強さを加えたカラーです。共産圏ですね。やっぱり。
本田　ルーマニアが逆転して優位に立てたのは策戦的な勝利でしょう。ガツの巧さをうまく活かしてました。再延長の時は東ドイツは疲れがみえてました。
藤本　そのほかの試合や国の印象はありますか。
村田　予選リーグは会場が分散してたのであまり見てませんがやはりB組のチェコ―ユーゴ戦はすばらしい迫力でした。
飯田　激しかったですね。反則退場者も多かったし。
竹野　あの試合みててちょっと思ったのですけど、もういちど日本がチェコと試合したらかなり勝算あるなって。
本田　策戦のたてかたが巧いと思う。チェコは。
飯田　名トレーナーといわれるケーニッツのケーニッヒたるところでしょう。12人をフルに活用しているし、選手も実に気持ちよく交代する。しかも代った選手のプレーがかなり変ったタイプでも他のメンバーがすぐそれに合わせられるのはすばらしい。攻めでも守りでも。
村田　ベンチワークはたしかにスキがありません。ユーゴがリードしていて退場者を出した。そうしたらすかさずブルーナを送りこんだ。左腕で1m90くらいの選手ですが彼はアキレス腱を切って2年間休み、去年の11月カムバックしたばかりなのです。その選手をエントリーして、いつ使うか考えに考えて来ている。結局ブルーナが期待に応えて反撃の口火を切ったのです。
飯田　ユーゴとデンマークの3位決定戦を見ててあの日のユーゴなら優勝してもおかしくないと思った。
本田　日本戦でまったく冷静さのなかったGKがすばらしいできで別人のようなプレーを見せていたのも印象的です。
村田　ルーマニア―デンマーク戦(準決勝)でルーマニアのグネスがエキサイトしてピーターセンをコート上でノックアウトしたシーンも思い出に残る。
勝　原因はなんです。
村田　7MTのとりかたが悪いといってグネスが興奮したあとでのことなのですがね。試合後、IHF技術委員の重鎮ペライ氏(西ドイツ)がグネスを呼んで戒告していたようです。決勝トーナメントというのは執念の激突ですね。
飯田　西ドイツは迫力を感じません。でもバスで選手以外に30人ほどの研究視察員を送りこんで来たり〝ハンドボール王国〟という感じはいぜんありますが――

高かつた日本への関心人気

藤本　審判技術はどうでしたか。
竹野　可もなく不可もなしですね。
村田　ステップの基準でちょっと食いちがいはあるようです。当り前の話ですが権威をもってやっていますね。日本に比べてみるとちょっとルーズな面もあるけど。
竹野　日本の判定解釈とそう違いません。
本田　フランス戦の時は、地元国なので辛くとられるのではないかと最初からスパートしてリードを奪う策戦だったのですが、そんな心配も結果的には要らなかったようです。
竹野　ハンドボールという競技は反則が多すぎるという批判がヨーロッパのスポーツ関係者の一部にあるそうで、そういう競技をオリンピックへ入れるのはどうかという声もおきているとか聞きました。
藤本　目立った選手をあげていただきましょうか。GKは?
村田　前回のホルスト(デンマーク)のような秀れた選手はいなかったようだ。
本田　ヨーロッパのGKは意外なことにシューターにとびこまれると首をちぢめ目をつぶって逃げ腰になるが東ドイツのフリエスケだけは目をつぶらぬ唯一のGKでした。
飯田　優勝キーパーのペヌ(ルーマニア)もそう目立つほうではない。
竹野　アルスラナジク(ユーゴ)は日本戦以外はよかったでしょう。アーノスト(チェコ)もうまい。
村田　ソビエトのヴィルソン、イチェンコはまったくそっくりのプレーをする。イチェンコというのは19才です。
本田　GKというのはディフェンス・マンのよしあしや、その出来不出来でも変って来ますからね。
藤本　FPでは
村田　日本が対戦した中ではマレス(チェコ)マキシモフ(ソビエト)。
飯田　東ドイツのロストとチンマーマン。
竹野　チンマーマンは決勝の時はもうひとつだった。
飯田　ガツ(ルーマニア)。生意気であんまり好かんが巧い(笑)
村田　グルイア(ルーマニア)、ルブキング(西ドイツ)らはやはり大スターのムードがある。グルイアなんかコートに入って来ただけで雰囲気をつくるというかつくらせるモノがあります。
飯田　ルブキングは去年9月大けがをしたとかでシュート数もへり好調とはいえないようでした。
勝　来年来日するというスウェーデンは
竹野　よく見てませんがレナルト・エリクソンあたりじゃないですか
村田　デンマークではペターセン。これは抜群。
飯田　デンマークのニールセンも話題でしょう。
村田　正真正銘のヒッピーですよ
飯田　デンマークでのレセプションの時パ

ンタロンはいてカウボーイハットかぶって来たのには驚いた。

藤本 日本選手の評判はどうでしたか

竹野 これは高かったですよ。どこいっても大変な人気です。やはりいい試合をしたからでしよう。

本田 野田さんがすごい人気。

村田 本田君はホンダのオートバイの名声をそっくりいただいた感じだったね(笑)

竹野 今回はよく日本人が観に来てくれていました。飛行機の中でも「あなたがたの活躍を新聞で読んだ」なんていってくれたし。

村田 外国のファンも日本のチーム力を高く評価してくれました。アジアからの特異性というものも相変らずあるのです。

攻勢的デフェンスを

藤本 それではだいぶ時間(紙数)もたちましたので今回のまとめをお話し合いいただきましよう。

村田 今度痛切に感じたのは選手層です。国内のレベルがイコールこの課題の解決になりましよう。エースを休ませることのできるチーム。これが一つの目標になると思います。

竹野 体格的にも大きくなったとはいえそれは身長だけで巾(重量)がない。栄養合宿でもやらなくちゃいかん(笑)

村田 少くとも今のウェイトから2kgは増えねばと思います。外国チームはほとんど身長から100を引き算すると体重量に近くなるのです。チェコなどはそれが0ですし、東ドイツが2.2、ルーマニアが3といったように均整がとれている。日本は平均身長179、平均体重71・9でしよう。8.1も差があるのですね。

勝 巾の問題は、ディフェンスの巾にも結びつくわけですよ。

竹野 技術的には、前にも話されているように受けの守りではなく攻めの守りの一言につきると思います。

攻撃面ではすばやいプレーというものの効果ははっきり出たと思うのです。あとはこれにみがきをかけることと強シュートを投げるようにすべきでしよう。

勝 パワーの差というのは一朝一夕にはつまらないと思うのですが。

本田 そうですね。シュートが足に当たっても外国選手の場合はポーンと飛んでいってしまいます。ともかくまだまだスピード差はあります。

村田 GK技術ももっと伸ばさなければいけないでしよう。FPはいわゆる日本的な戦法の開発である面では互角以上にまでなっていますが、GKは未だしです。

竹野 FPはたしかにレベルアップしています。前に比べればすべてに正確さを増しています。

村田 日本が健斗できた一因として去年のヨーロッパ遠征があげられます。

本田 多少なりともヨーロッパの力というものを知っていたことはプラスです。

飯田 初めてのヨーロッパだったのは斎藤君だけだったからね。すべての面で零でないですよ

村田 ホテルの手続き一つとってもそれはいえます。休養すべき時は休むということを全員がわきまえていたし、つくづくキャリアだなあと思いました。

竹野 こういうことはなんでもないようですが、すぐ実戦にひびいて来ますから。

村田 10位というのは、上位へのスタートラインですよね。ようやくここまで来てヨーロッパの連中に対して気遅れがなくなったといえましよう。

竹野 外国チームなどはいわゆるジュニアクラスも国際交流が盛んでそうした雰囲気になれる土壌が若い時からある。日本は地域的にもムリですし、できるだけ海外遠征のチャンスをつかむよう考えて欲しいです。

本田 日本に帰って来るとヨーロッパで身につけたプレーが通用しないというのもマイナスです。GKでもヨーロッパでのように前へとび出せばフワッと頭上を浮かして取られるでしようし、対ヨーロッパ戦法をそのまま学生リーグでは使えないのです。

村田 地域差もそうだしハンドボール選手のおかれている環境も相当ちがいます。西ドイツなんかは寝室、食堂つきのバスで今回は来征して来てましたし。

竹野 でも日本も強くなりましたよ。以前はクラブ相手にも負ける気がして不安が始終つきまとっていた。そして実際に敗れたのですが、今ではクラブとのゲームは自分たちの調整役にさえできるようになった。

村田 引き分け試合もこれまでは「引き分けにされた」が「引き分けにもちこむ」までになってる。

竹野 それに「10位」というものへの評価は、僕らがいうのはおかしいですがヨーロッパでは非常に高いのです。

日本の実力、確実に向上

藤本 未確認の情報が多い時ですがオリンピックの見とおしというものは、今回で一応たちますか

村田 卒直にいってルーマニア、東ドイツソビエトあたりはいちだん格上だが、その他の国には互角だと思います。ハンガリーにしてもスウェデンにしても西ドイツにしてもですよ。デンマークも主力の加っている地域選抜と当ってみて自信のようなものは持っている。

しかし、覚えておかねばいけないことは勝ったからといってフランス、アイスランドそのほかノルウェー、ポーランドあたりを軽視することは許されないとです。

藤本 しかし、こうしてお話を伺っていると「やればいけそうだ」という自信というか強気な意識をはっきり口に出せるまでに日本のレベルはあがったのですねェ

勝 今までは「善戦しよう」だったのですから――。

藤本 本田君や飯田君は今回の遠征をどのように反省してますか。本田君は初出場なわけでしたが。

本田 いちおう思うようにやれて満足していますし、次にもういちどチャンスが与えられればさらに上の目標を狙えると考えています。

技術的にはよく動きますしこまかなプレーもいいのですがもう少し相手によって対応する力を身につけるべきでしよう

攻撃ではセットを組んでタテの切りこみが中心ですが、横からシャープに切っ

ていくといったプレーも、（これはスケールの大きさを伴ってのことですが）、あっていいと思います。
　それとやはり基礎でしょう。僕は感心したのですが西ドイツのGKやバックスはころがって来るボールを腰を入れて拾うのです。たいていの外国選手は腰を折ってボールをわしづかみに拾いあげるのですけど。西ドイツのナショナルプレィヤーがそうした基本的なものをごく自然にいつも出せるのは感じることがありました。

藤本　飯田君は二度目の出場ですが、この前と比べてどうでしたか。

飯田　日本の進歩はいちぢるしいです。前は負けるんじゃないか、ないかって思いながらゲームが進んでいたものです。そうした劣等感がまったくなくなって全員が自信をもってプレーしています。これはやはり去年のヨーロッパ遠征の成果といえますでしょうし、全員に少いながらもキャリアがつまれたからだと思います

竹野　今回の遠征の反省をコーチの立ち場から考えますとサウスポーがいなかったことでしょう。また野田君らのプレーが成功したことからみて日本チームは特殊技能をもった選手をあと一人か二人欲しいものです。
　具体的な面では再三申しあげましたようにディフエンスしながらつねに攻撃姿勢を忘れぬことだと思いますね。

村田　以前に比べて何よりも力強くなったこと、精神力が高められたことがあげられます。しかしベストフォァの激突をみていますと技術面の差もさることながら今以上の精神力が必要な気がします。
　こういう言葉があるかどうかは判りませんが「もっと上の精神力」が望まれます。
　これはナショナル選手だけではなく母体となる国内各チームも心がけることなのです。
　高校などでよくファイトとか気力とかいいその重要さを説きますが、どうも絵に描いた餅に終ってしまうことが多いようです。
　実際面では個人々々のレベルアップをいっそう企って選手層の厚味を築くこととが必要だと感じます。もちろん本場ヨーロッパと数多く接触するのも必要ですが国内の頂点強化対策をさらに濃密なものにすべきでしょう。
　幸い日本のハンドボール選手は頭脳的に大変秀れています。
　ある場面ではそれがかえって災いさえしているのですが、それはそれとしてクレバーな面は欧州の関係者も高く評価しています。
　小がらで、地域的ハンデを脊負った日本がこれほどやるのはその頭脳にあるというのが定評です。
　日本ハンドボール界の前途は明かるいものと確信します。
　今回の代表チームに寄せられた多くの御支援に深く感謝するとともにいっそう精進しオリンピックや、世界選手権での好成績を目指したいと考えています。

勝・藤本　どうも皆さん、お疲れのところ長い時間ありがとうございました。（4月5日・日本ハンドボール協会室で）

● 世界選手権リポート

多彩な選手層誇るチェコ

江名英彦

日本にとって世界選手権の第一戦・対チェコ戦は、二月二十五日パリから七〇〇キロ隔れたスペイン国境近くのバイヨン市で行なわれた。この日の為に建てた体育館は当日完成したばかりで特にレンガ色のタータンフロアは適当に弾力のあるプレーのしやすいものであった。

二〇時三〇分スローオフとなったが、前回優勝国のチェコチームについての知識は全く無に等しい状態での対戦で、前半いきなり身長の低いマーレスに、右サイドから大きく廻り込んできて反対側45度のフリースローラインあたりからロングシュートされ、三点続けて得点された事が大きく影響し、この為デフェンスのバランスが崩れその間、ズーダの早いモーションからのロングシュートやポストプレーと、多彩な攻撃でチェコのペースとなってしまった。日本の攻撃も立上り再三のチャンスに恵まれたがシュートミスの続出で自から芽を摘み取ってしまい、前半2—8と大きく開いてしまった。

後半に入って日本は早いボール廻しから着々得点を重ね一進一退のゲームをしていたが、結局前半の点差が大きく終了間際に連続ゴールを許してしまい、9—19の結果に終った。

全般を通じチェコは個々の選手のシュート力、キープ力、ジャンプ力に優れ、迫力ある攻撃展開を繰返し、デフェンスのつめの速さ鋭さが注目される。

チェコチームは、個々に特色のある攻撃型、防禦型の選手で編成されており、それが試合経過によってその時その時の最強のチーム力としてメンバーチェンヂが行なわれ、十二名が凡てレギュラーといった感がある。特にデフェンス専門の選手は我々の体格と同じぐらいだが、腕力、ジャンプ力に優れ素晴しいデフェンスをしていたのが印象的である。

日本チームも特徴を生した速いボール廻しでチェコゴールをおびやかしたが、防禦面での接触プレーに弱く無理な体制からでも身体を預けて押込められるケースが多くあった。これからの日本チームとしては、やはり防禦面に大きな課題が残っているように思える。特に基礎的な体力である腕力、ジャンプ力等は大いに鍛えなければならないだろう。それに外国チームの研究、資料集め等も、もっと積極的に取組んでいかなければいけないと思う。今回のチェコ戦に於ても、日本はほとんど無策の状態で臨んだ反面、チェコはドイツでの日本—ブランシュバイグ選抜との試合に、トレーナーを送り込んでまえもって日本チームを研究していたという事も、敗戦の一因となってると思う。(FP・三景)

情報収集の弱体を痛感

近藤信行

ヨーロッパに行って外国チームと試合すればするほど、個人個人もそうであるようにチームとしても、外国チームに対する策が生まれ、力も急カーブに上昇したと思う。

その力を最大限に発揮したのがこのユーゴの一戦である。この一戦から得た〝やれば出来るんだ〟という気持を失なわずにもっていれば、必ずや将来この借りを返すべく努力して世界のAクラス入りができることを期待します。タシマイダンでの勝利、そして今回の引き分け、あと一歩で3位のユーゴをしのぐ力がつきます。

さてこのユーゴ戦を振り返ってみて反省する事、これからしなければならない事がたくさんあります。まず第一に情報収集活動を挙げてその活動が実際の行動になって行なわれることを強く希望します。

タシマイダン大会で出場していなかったユーゴのエース・ザグメスターについて過去の記録、前日のチェコ戦終了後のレセプションの席でもあらゆるところに手を回しその情報収集にあたったところ身長一九〇センチ以上、左利き、典型的なロングシューターとの情報であったから対戦まで仮想してミーティング・練習など時間をつぶし万全の構えのつもりで会場に向った。しかし、あにはからんや試合開始の数分前になって右利きと知りア然とする。いざゲームがはじまり典型的なロングシューターと思いきやこれ又異なりデフェンスをかきわけてゴールに突進す

る典型的なパワーハンドボールの選手であった。これらの誤報にもかかわらず、世界第三位のチームと引き分けたのは〝何が何でもやるんだ〟と云う選手一人一人の結実なのか、それとも正確な情報がもたされていたならばこのゲームはものに出来ていたのか？

確度のうすい情報を信じていた我々が幼稚なのか、チェコからの情報などを含め彼ら（ヨーロッパのハンドボール界）にしてやられたのか？これこそ百聞は一見にしかずのことわざ通りでした。今までヨーロッパの情報のさぐりあいは壮烈をきわめると耳にしていたが、このユーゴ戦と我々が世界選手権地に乗り込む最後の土地ドイツまでわざわざチェコのトレーナーと中心選手がメモ用紙片手に我々のゲームを観戦に来ていたのがいかに重要な事か思いしらされた感じでした。

今後、世界の上位をめざすにあたっては、我々の技術・戦術面での強化はもちろんのこと、コンディショニングの問題、更には、この情報の収集がいかに大切なことかを実感として味わいました。これをヨーロッパ球界から離れた日本で、いかにして行なうか、種々難かしい問題がありましょう。言葉の問題、遠く離れていて試合を眼のあたりに見られないという点などがありますが、何とかこれを解決して確度の高い情報を収集すること、これはどうしてもやらなければいけない問題です。これからは情報収集にあたっていかなければ、ヨーロッパの壁にたちむかうには大きなハンディキャップを背負うこととなりましょう。（FP・大崎電気工業）

遠征総成績

△17—17	デンマークユースナショナル
△21—21	KFUM・オーハス
●17—18	ニコビング選抜
	（以上デンマーク）
○13—12	ハンブルグ選抜
○24—22	ブラウシュバイク警察
	（以上西ドイツ）
● 9—19	チェコ
△17—17	ユーゴ
○21—15	アメリカ
○20—19	アイスランド
○22—13	フランス
●12—27	ソビエト
	（以上世界選手権）
○18—17	オランダ
○23—17	オランダナショナルB
○23—15	オランダ
	（以上オランダ）
○33—13	イタリア
	（以上イタリア）
△10—10	イスラエル
○17— 6	イスラエル
	（以上イスラエル）

17試合10勝３敗４分

意識しすぎた〝得失点差〟（米国戦）

斎藤光男

三月一日八時半起床、朝食後九時半アジェンを後に対アメリカ戦の行なわれるツールズに向う。一時間半でツールズに着き「ホテル・グランド」に入る。一時間後の昼食ではチェコのチームも丁度食事中であった。二時十五分バスで体育館に着きユニホームに着がえて外にある小さい体育館にて軽いトレーニング。アメリカチームは練習を十分位で上ってしまう。

五時三十分セレモニー終了後、アメリカボールにてスタート。昨日の引き分けの時点で日本得失点差。マイナス10、ユーゴがチェコに負けたとして36点の大差である八位以内に入る為には、その大差を少なくとも埋めることが必要である。その様な事が選手の頭の中にあり全員堅くなり立ち上がり、動きが良くない。アメリカは協会が出来て間もないとのこと、バスケット的な動きで攻めて来る。ディフェンスは非常に荒く日本としてはやり難い様に見えた。しかし徐々に速攻等で得点を重ねていくが、ミスも多い。得点差の事をやはり意識してしまうのか、シュートを打ち急いだりパスをすれば当然有利に展開出来るのにむりをしたりして前半10対7。ハーフタイム時、監督から気合いを入れられ選手一同奮気して十分過ぎに6点差。ここでメンバーチェンジしたりして速攻等で十点差まで行くが残り五分位で相手に、たて続けに速攻をゆるし、後半11対8で結局21対15に終る。日本は九位決定戦に出場、念願の八位入賞を果すことはできなかった。（FP・日体大4年）

世界選手権 日本選手個人得点

（得点順）

	試	S	得
飯田	6	55	21
木野	6	42	20
近森	6	34	17
野田	6	29	14
東	6	18	9
近藤	5	21	7
江名	5	11	5
斎藤	2	10	4
竹野	5	5	2
早川	5	7	2
藤中	5	3	0
中井	2	1	0
計	6	236	101

日本に似たアイスランドの攻撃

中井武三

昨日までの予選で惜しくもベスト・エイト入り出来ず、この日3月3日から、日本、ソ連、フランス、アイスランドの四者で九位決定戦が初まる。八時三十分起床、すぐ朝食を食べ一時間程各室で休養をする。十時に練習をする為ホテルから四十分程の所に体育館があり出かける。すでに地元フランスチームが練習していた。終るのを待って各自の体調を整えるのとコンビネーションを主体に練習をした着替えてすぐ昨日までの予選の反省をする。

十七時三十分ホテルを出発。全員今日のアイスランド戦は、パリ市内の本会場で行なわれると思っていたが、聞く所によるとパリの郊外との事。パリ市内を抜け高速道路を走る。どこを走っているのか皆もく見当がつかない。なんと試合会場は、ホテルからバスで二時間もかかる所であった。この様な事は日本で到底考えられないが、外国ではこういう事がしばしば見うけられた。

試合は二十時三十分から。試合前のウォーミングアップを行なったあと試合に臨むにあたってミィーティングを行なう。アイスランドの事は個人の技術的なもの、試合はこびなどほとんど知識がないただ背が高いわりにアンダーシュートが多いと言う事が練習をみてわかっただけである。試合前の注意は昨日までの悪かった事を少しでも良くするようにとの事だった

ゲームは初めから日本ペースで楽勝かと思われたが終ってみれば一点差、最後は少しひやっとした。

昨年の欧州遠征そしてこの世界選手権に来て多くの試合を行なって来たが、やはり国々によってチームカラーが異なっている。アイスランドは日本の攻め方に似ていた。ゆっくりボールを廻し、ミドル、アンダーシュートを数多く射って来た。このアンダーはバックがカット出来ないくらい低くとまどった。試合後簡単なレセプションに出て、〇時十五分ホテルに帰る（FP・同志社大4年）

終始リードのフランス戦

飯田誠行

九—十二位決定戦リーグ第二日第一戦のアイスランドには少差ではあるが一勝し、今日は昨日以上にやろうではないかと選手一同気合いを入れ合っていた。フランスはと云えば前日、ソ連に大敗しチームが少し意気下り気味であったのであろう。だが地元であるだけにやる気を出すとも思われた。午後九時にスローオフ。前半立ち上り両チーム共ペースがつかめず、シーソー・ゲームで進む。声のつながりも少し悪ったが時間と共によくなった。半ばより我々のディフェンスの「つめ」もよくなり、速攻、セットプレーからもうまくコンビネーションが決まり、徐々にリードしていった。又この頃相手の長身シューターがシュートの後足首を捻挫したのかベンチに引っこむ。その後も日本は次々に加点し前半13—7と大きくリードして終了する。

我々のオフェンスに対して相手ディフェンスは大変やりやすい形態を敷き、六人のセットでボールを回してもその動きに合わせて個々の位置につめ寄り、その上、サイド・ディフェンスにしてもサイドのプレーヤー寄りに大きく広がって形づくった。そこでワン・フェイント、もしくはワン・ブロックから即シュートへと結びつけられ、かなりのシュート率を上げた

後半に入って終始リードのまま進めていた。ディフェンスにもどってもよく声を出しよくつぶしていた。しかし半ば過ぎ頃よりフランスチームも激しく動き、ディフェンスがそれと共に激しくなって僕が二分、五分と退場を命ぜられてしまった。その間五人がよく守り勝利を日本のものとした。

昨日のフランスチームのデータがあった事もチームとしていい結果があったと思いました。（FP・大崎電気工業）

パワーの増強が課題

ソ連戦の反省

早川清孝

日本・ソ連共にフランス、アイスランドを倒し、互いに二勝同志の決戦となった。ソ連とは昨年のユーゴスラビア大遠征（タシマイダン杯）の際に対戦した経験があり敗を喫した苦い体験もあるので今回は是非とも勝利をものにし、雪辱を計りたい所であるがソ連は昨年のメンバーを上廻る選手層を示していた。また、大陸的などっ

● 世男選手権リポート

しりと落着いた力強さ又精神的、肉体的な面においても、日本よりはるか数段上を行く感じで日本は全員一丸となり心して臨まねば勝目はほどとおいように思えた。

しかし、試合と言うものはその日その日のコンディションによって大きく左右される為、戦ってみなくてはわからぬ状態である。まして日本はアイスランド・フランスを大差にて破り勢いに乗っているしその余勢をかりて戦えば実力以上の力が出るのではないかと思われる。そうなるとソ連と言えども軽るい気持ではいられまい。

試合開始緊迫した雰囲気で激戦となった。前半十分頃迄は一点を争う白熱した好ゲームであったが時間が経過するにつれ徐々に体力の差が表われ、ソ連の測り知れぬ力強さをまざまざと見せつけられた。日本も懸命に食下がり反撃に転じたものの所詮通じるものでもなく、力つきた感じで防戦一方となった。日本がやっとの思いで得点しても、ソ連は長身からの強力な攻撃により容易に得点する。あまりにも強過ぎる感じでなすすべもなく昨年と同様に大敗を喫したこのソ連が何故ベストエイトにもれたかまったく解せない。

今後世界の強豪を相手に対等に戦う為には、「体力の強化」すなわちパワーの強化の一言に尽きるのではないか、これが今後日本における最大の課題とされる事は言う迄もない事であろう。

ソビエトをはじめ今大会における上位チームは流石に強く、強烈な印象を受けた。日本にとってまだまだヨーロッパの壁は大変に厚いものであるように思える。（FP・ワクナガ薬品工業）

"世界10位"の力強さ示す
全日本国内サーキット（帰国報告試合）

世界選手権から帰国した全日本男子（田村団長、村田監督ら16人）の報告試合は「第2回全日本国内サーキット」として3月30日の岐阜大会を第1戦に神戸、大阪を転戦した。

全日本男子は"世界10位"の実力にふさわしい攻守を示して健斗する地元選抜チームを圧倒、順当に3勝をあげた。

全岐阜の健斗及ばず

第1戦・全岐阜との試合は3月30日午後六時から岐阜市の県営体育館で行なわれた。（観衆一千）

全日本 25（13—5 12—7）12 全岐阜

	【全岐阜】		得
GK	渡辺	（常盤工業）	0
GK	日比	（〃）	0
FP	石樽	（岐阜教員）	2
FP	高橋	（常盤工業）	4
FP	安井	（〃）	0
FP	山田	（〃）	2
FP	神谷	（岐阜教員）	2
FP	鳥村	（常盤工業）	2
FP	丹羽	（〃）	2
FP	杉本	（岐阜教員）	0
FP	石丸	（常盤工業）	0
FP	大野	（〃）	0
			12

前半18点連取の猛攻

第2戦・全兵庫との試合は4月1日午後5時から神戸中央体育館で行なわれた。（観衆七百）

全日本 39（20—9 19—4）13 全兵庫

	【全兵庫】		得
GK	新井	（スワロー兵庫）	0
GK	上野	（スワロー兵庫）	0
FP	北山	（スワロー兵庫）	4
FP	大原	（スワロー兵庫）	1
FP	畑	（スワロー兵庫）	6
FP	為近	（神戸製鋼）	0
FP	林	（富士レジン）	0
FP	山中	（スワロー兵庫）	1
FP	木村	（神戸製鋼）	0
FP	浜野	（スワロー兵庫）	0
FP	井上	（スワロー兵庫）	0
FP	幸田	（スワロー兵庫）	1
			13

▽その他の出場者 FP木野（スワロー兵庫、得0）

立ちあがりから一方的

第3戦・全大阪との試合は4月2日午後6時から大阪市中央体育館で行なわれた。（観衆千五百）

全日本 29（15—7 14—4）11 全大阪

	【全大阪】		得
GK	島崎	（大阪イーグルス）	0
GK	寺田	（佐野工ク）	0
FP	東	（大阪イーグルス）	1
FP	飯端	（三国丘ク）	1
FP	吉川	（宗形製作所）	0
FP	清水	（　）	1
FP	福井	（大阪イーグルス）	1
FP	樫塚	（大阪イーグルス）	1
FP	脇田	（大阪経大）	3
FP	戸田	（ワクナガ薬品）	0
FP	高橋	（ワクナガ薬品）	1
FP	森	（大阪イーグルス）	2
			11

▽その他の出場者 FP土田、花岡（三国丘ク）＝得0

【全日本3試合個人得点】

		大	兵	岐
GK	本田	0	0	0
GK	下里	0	0	0
FP	飯田	4	5	4
FP	近森	2	2	0
FP	木野	3	6	5
FP	東	3	6	1
FP	野田	1	8	6
FP	近藤	1	3	2
FP	中井	3	2	3
FP	藤中	4	×	2
FP	江名	2	2	1
FP	早川	3	1	1
FP	斎藤	3	4	0
FP	竹野	0	0	3
		25	39	29

○……三試合とも全日本の実力をまざまざと見せつけた試合になったが一日も早くこの全日本のレベルが日本中に及び、その中から新しい更に力強い全日本が再び組織されることを望みたい。全日本は全日本としてとびぬけた存在ではなくあくまでもピラミットの頂点であるようになければなるまい。

なお日本協会は今後も積極的に「全日本」の国内サーキットを行う予定である。

☆☆☆☆☆☆☆

海外トピックス

杉山　茂
藤本　強

ルーマニア、新人で優勝
―ラテンカップ―

第三回ラテンカップ国際リーグは世界選手権後最初の国際大会として3月23日から30日までリスボンに7ヶ国が参加して行なわれた

各国とも新進選手を中心にメンバーを編成したが世界選手権国ルーマニアはさすがに層の厚さを示し各試合とも圧倒の試合ぶりで優勝を飾った。

また第3回世界選手権（一九五八）以来あまり活動をみせなかったブラジルが久々に欧州球界へ登場、イタリアの国際大会初出場など話題豊富だった。

スペイン	39－7	イタリア
ポルトガル	29－18	ブラジル
フランス	27－16	モロッコ
フランス	17－16	スペイン
ポルトガル	22－15	モロッコ
ルーマニア	36－16	ブラジル
フランス	34－5	イタリア
ルーマニア	28－15	モロッコ
スペイン	24－14	ポルトガル
ルーマニア	19－10	スペイン
モロッコ	24－23	ブラジル
ポルトガル	41－6	イタリア
スペイン	24－12	ブラジル
ルーマニア	37－7	イタリア
フランス	24－15	ポルトガル
スペイン	23－13	モロッコ
ブラジル	27－12	イタリア
ルーマニア	33－19	フランス
ルーマニア	19－9	ポルトガル
モロッコ	43－10	イタリア
フランス	29－15	ブラジル

【順位】①ルーマニア6戦全勝②フランス5勝1敗③スペイン4勝2敗④ポルトガル3勝3敗⑤モロッコ2勝4敗⑥ブラジル1勝5敗⑦イタリア6敗

ルーマニア・東独代表決勝か
―男子ヨーロッパ杯―

世界選手権のため中断していた第11回男子ヨーロッパカップトーナメントは3月20日準々決勝から再開。ベストエイトの激突は強豪の順当勝ち。4月4、11日に行なわれた準決勝はダイナモ・ベルリン（東独）×クルベンカ（ユーゴ）はともに本拠地で1勝づつをあげた末ベルリンが、注目の好カード、グンメルスバッハ（西独）×ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）はブカレストが先勝した。

▽準々決勝

VfL・グンメルスバッハ（西独）	①20－11 ②17－22	ツルド・モスクワ（ソビエト）
RK・クルベンカ（ユーゴ）	①26－12 ②15－18	FC・バルセロナ（スペイン）
SC・ダイナモ・ベルリン（東独）	①18－8 ②18－10	グラスホッパーズ（スイス）
ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）	①26－20 ②18－20	ホンブドブダペスト（ハンガリー）

▽準決勝

RK・クルベンカ	15（4－3 11－3）6	SC・ダイナモ
SC・ダイナモ	14（9－1 5－3）4	RK・クルベンカ

得点計20－19でSC・ダイナモ・ベルリンが決勝進出

ステアウア・ブカレスト	16（9－9 8－4）13	VfL・グンメルスバッハ

2回戦の記録未着

S・カウナスら順当勝ち
―女子ヨーロッパ杯―

一方、女子の第10回ヨーロッパカップも準々決勝が終わり、3連勝を狙うシャルジリス・カウナス（ソビエト）など有力チームが順当にベストフォアへ進んでいる。ヨーロッパではめずらしい単独学生チーム・テイミソアラ大（ルーマニア）は健斗空しく敗退した

▽準々決勝

HG・コペンハーゲン（デンマーク）	①17－6 ②11－10	IFC・ニュウルンベルグ（西ドイツ）
SC・ライプチヒ（東ドイツ）	①9－6 ②18－11	テイミソアラ大（ルーマニア）
スパルタク・キエフ（ソ連）	①14－12 ②26－12	AZS・ウロクロー（ポーランド）
シャルジリス・カウナス（ソ連）	①16－12 ②17－10	IF・スクエバーグ（ノルウェー）

メキシコが活動を再開

一九四〇年代にいちど花を咲かせかけたメキシコハンドボール界はその後、わずかにドイツ人学校などで行なわれているだけであったが、一昨年のメキシコ・オリンピック時にS・ペライ、H・ルブキング氏ら西ドイツの有力者が同国を訪問したのを機会に再び活動がはじめられた。

今年度内に第1回室内選手権が行なわれる予定ですでにメキシコ体協に加盟、IHFへの参加も今秋の総会までに申請するようだ。会長にはウォルター・シュウエッド博士が就任している。

エチオピアも協会創立

エチオピアでもハンドボール実施の動きがあり、近く協会を創立小規模ながら最初の国内大会を開く。

近年、アフリカ大陸におけるハンドボールの普及はすばらしいものがありこの面でもっとも立ちおくれているのはアジア地域ということになってしまいそうだ（杉山）

FA・ゲッピンゲン優勝

——西ドイツ室内選手権——

ドイツブンデスリーガは昨秋より、各地で熱戦がくりひろげられていたが、本年は世界選手権があったため、例年より早く、シーズンを終った。

試合形式は例年通り、南北リーグに分れ、行なわれた。両リーグとも、8チームずつで、ホームアンドウェイ方式で、一チームが14試合を行なった。

北リーグでは、VfL・グンメルスバッハ、ハンブルガーSV、GW・ダンケルセンが入り乱れて混戦を続けたが、グンメルスバッハが前半のTV・オップムに対する一敗だけで、あとは当面の相手を全部たたき、終盤になって独走態勢に入り、そのままゴールした。

一方南リーグは、当初から、FA・ゲッピンゲンが独走態勢を固め、TV・グロスワルスタットに後半一敗を喫っしたが、危気なくゴールした。

北では、ハンブルガーSVはグンメルスバッハに2敗したのが大きく響き、またGW・ダンケルセンもグンメルスバッハに2敗したのが命取りとなった。両チームは共に勝ち点20で同一となり、得失点差で僅かに勝るGW・ダンケルセンが二位となった。

南では、SG・ロイターハウゼンが二位を占めたそれ以下は両リーグとも混戦が続いたが、北ではTHW・キールが5位、RSV・ミヨールハイムが最下位、南では前回快調であったエスリンゲンが最下位になるように、入れ代りが激しかった。

南北両リーグの一位・二位によるドイツ選手権は準決勝がホームランドアウェイ方式で決勝は単一発試合で行なった。

FA・ゲッピンゲン VfL・グメルスバッハに快勝

準決勝は北リーグ一位のVfL・グンメルスバッハと南リーグ二位のSG・ロイターハウゼン、南リーグ1位のFA・ゲッピンゲンと、北リーグの同率二位ハンブルガーSVの対戦で行なわれた。

VfL・グンメルスバッハ ①18—17 ②24—10 SG・ロイターハウゼン

VfL・グンメルスバッハ2勝

FA・ゲッピンゲン ①15—13 ②14—13 ハンブルガー・SV

FA・ゲッピンゲン2勝。

この結果、ヨーロッパカップのかっての覇者同士の斗いとなった

下馬評では、まず絶対にグンメルスバッハのものとされていたが予想に反する結果となった。

試合はフランクフルトの室内競技場に一万一千二百という超満員の大観衆を集め行なわれた。

スタートこそグンメルスバッハはとびだしたが、以後は全く、ゲッピンゲンペースで試合は進んだ

グンメルスバッハはシュミットを中心に後半追いあげ、1点差に迫ることが3回あったが、その度にミヨラーにつきはなされた。

FA・ゲッピンゲン 22（12—11、10—7）18 VfL・グンメルスバッハ

	〔FA〕	得	〔VfL〕	得
GK	ラスジャン	0	ポダク	
FP	ジンガー	2	K・ブラント	1
	フリヨーガー	1	リンゲルバッハ	0
	アントン	0	ベールター	2
	バイエル	0	フェルドホフ	1
	パッファー	4	ケラー	1
	ミヨラー	5	J・ブラント	2
	ブッヒャー	7	ベステベ	0
	アイゼレ	2	シュミット	10
	エペレ	1	コズメール	1
	シュンター	0	ブラウンシュバイク	0
7MT	(1)	22	(7)	18

オリンピックの会場

ミュンヘン・オリンピックのハンドボールが男子16ケ国で行なわれる場合、その競技方法は今春の世界選手権と同じになる予定だが4ケ国づつ4組の予選リーグはミュンヘンのほかアウグスベルク、ニュルンベルグ、ゲッピンゲンの各都市が会場として推せんされている。

11人制のヨーロッパ杯

11人制を弧守する各国チャンピオンによる第3回男子11人制ヨーロッパカップは6月ロイタースハウゼンで行われるが参加を予定されるのは次の各クラブである。

GW・ダンケルセン（西ドイツ前回優勝）、SC・ロイタースハウゼン（西ドイツ）、SO・センガレン（スイス）、シウルディア・シッタード（オランダ）、ATSV・リンス（オーストリア）

世界選手権後の国際交流

世界選手権後4月上旬までに行われた国際試合は9試合でそのうち5試合に日本が登場した（対オランダ、イスラエル各2、対イタリア）

ルーマニア 21—13 ポーランド

オランダ 41—13 フランス

フランス 13—11 オランダ

西ドイツB 22—14 デンマークB

女子でチェコ安定

また女子はオランダが次の3試合を行っている。

オランダ 8—6 フランス

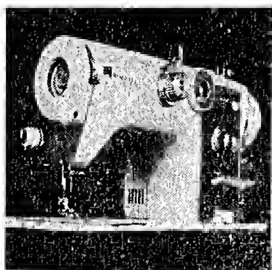
チェコ 13—4 オランダ

チェコ 13—9 オランダ

（藤本）



鍛えぬかれたフォームにこそ、メカの真髄がある



■ジューキミシンは精密工学の結晶とうたわれる高級品。シャープなスタイリングで、その名を高めています。

ジューキ

東京重機工業株式会社

学生シーズン幕開く
日体大男女優勝

関東学生春季リーグ戦は新シーズンの開幕をきって4月20日駒沢第二球技場で熱戦の火ぶたを切った。

参加したのは男子1部が全日本学生選手権校・日体大はじめ8校2、3部各8校、4部12校と女子5校。日体大が男女優勝した。

各校とも新人の補充に悩み、比較的卒業生の痛手が少いチームが序盤戦を勝ち抜いているようだ。

▽第1日　法政25―11日大、中大22―10東教大、芝工大22―14立教日本大27―5明治　女子＝日体大17―4東京学芸大

▽第2日　日体大16―4東教大、芝工大37―9日大、中央32―14明治、法政10―8立教　女子＝東女体大24―2東京学芸大

▽第3日　中央21―6日大、法政25―17明治、芝工大20―7東教大日体大14―8立教　女子＝日体8―2日女体大、東女体大15―4東教大

▽第4日　立教12―6東教大、日大21―20明大、日体大10―9法大中央24―12、芝工大、女子＝日体9―7東教大日女体大7―3学芸大

▽第5日　東教大11―8明大、立教16―13日大、芝工大21―12法大日体大14―5中大、女子＝東女体大20―6日女体大

▽第6日　法大12―9東教大、芝工大26―10明大、日体大13―9日大、中大21―16立大、女子＝東教大9―6学芸大

▽第7日　日大14―13東教大、立教21―14明大、中央26―7法大日体15―8芝工大、女子＝東教大5―2日女体大、日体大8―3東女体大

関西学生、女子で開幕

関西学生春季リーグ戦は4月25日大阪府立大で行われた女子2試合で開幕した。

▽第1日　女子＝大阪体大21―1大阪薬科大、甲子園大17―2夙川女大

▽第2日　関西学院14―11甲南大大経大22―10桃山学院、同志社16―6関西大、

東海学生も

東海学生春季リーグ戦は4月25日名古屋大球技場でをあけた。

▽第1日　中京16―6名大

▽第2日　愛媛23―12岐大、名城大9―8中京大、明名大19―17中工大、女子＝中京12―11中京

【学生リーグは次号に詳報】

関東9、関西7、東海4など
全日本学生出場割当数決まる

新年度初の全日本学連代表者会議は4月4日、東京岸記念体育館（体協）で開かれた。

西会長、田中理事長、各地域学連代表（北信越、九州は欠席）が出席、今年の全日本学生、今後の連盟運営について協議した。

全日本学生（男子第13回、女子第6回）は関西学連主管で11月24日から28日までの5日間、大阪市中央体育館と府立体育会館で開くが、出場校については、すでに申し合せの男子を32校に制限することを確認、加盟校数に比例して後掲のように各地域学連別割り当て数を決めた。前年度上位二校（日体大、中央大）は推せん出場する。

女子はこれまでどおり自由に参加できる。

【第13回全日本学生男子出場校割り当て数】▽東北・北海道▽関東▽北陸信越2▽東海4▽関西7▽中国四国2▽九州3▽推せん2（前回1、2位）

このほか、さきに全面改正した規約にのっとって新役員の選出を急ぐことになり、新設の会長推せん理事（7名以内＝第10条）については、関東学連を中心として西会長が近く人選する。また、今年度から全日本学連登録費を一校千五百円（現行千円）に値上げすることを決めた。

関東学連理事長に滝口氏

関東学連は田中理事長が全日本学連理事長に専念するため辞意を表明、後任の人選を急いでいたがこのほど滝口三郎氏（明大出、明大監督）に決めた。

関西学連役員決まる

関西学連は昭和45年度役員を次のように決め発表した。

▽会長　八田昌三（関学ＯＢ）▽理事長　久保義雄（同大ＯＢ）▽審判長　前田吉弘（大阪経ＯＢ）▽委員長　佐藤吉平（桃山学院大）▽副委員長　山本剛士（大体大）▽会計　中西博（立命館大）

東北北海道学連も

東北・北海道学連はこのほど新年度役員を次のように決めた。

▽会長　菅原菊志（東北大部長）▽理事長　橋森禎二（東北大ＯＢ）▽審判長　斎藤節郎（東北学院大ＯＢ）▽委員長　佐藤久（仙台大）▽副委員長　安藤正博（東北大）

大学定期戦

第9回関大―中京大定期戦は4月5日関大体育館で行われ、劣勢の関大が後半に急迫、引き分けへもちこんだ。対戦成績は両校の3勝3敗2分（1中止）

関西大15（6―9、9―6）15中京大

各地の記録

大崎、接戦の末三景降す

第3回関東実業団選手権は4月4、5、11、12の4日間横浜公園体育館に男子12チームが参加して開かれた。

3チームづつ4組の予選リーグを行い各組同位者でそれぞれの順位決定トーナメントという試合方法が採られた。

決勝トーナメント（ベストフォア）には予想どおり大崎電気（埼玉）、三景（東京）のほか抬頭いちぢるしいセントラル自動車（神奈川）、クラブ界の有力チームAOK栃木の主力を軸とした初出場の清国産業（栃木）が勝ち進んだ決勝は大崎―三景の全日本実業団と同カードになり、三景が喜田（中大出）、武井（法大出）ら新戦力を加えて前半巧みにリードを奪った。大崎は後半、飯田、近藤東の世界選手権代表を送りこんで盛り返しタイムアップ4分前東のゲットが決勝点となり3連勝を飾った3位には健斗の清国産業が入った

女子は三菱鉛筆の解散で東京重機（東京）、大崎電気（埼玉）が2回戦を行う予定だったが大崎が大会直前、故障者続出で棄権、東京重機の認定優勝に決まった。

▼予選リーグ順位

▽A組①三景（東京）②日進商会（神奈川）③自衛隊第四航空群（千葉）

▽B組①大崎電気（埼玉）②日本発条（神奈川）③塚本商事（東京）

▽C組①清国産業（栃木）②日本鋼管（神奈川）③自衛隊勝田（茨城）

▽D組①セントラル自動車（神奈川）②千代田印刷機製造（千葉）③原子力研究所（茨城）

▼順位決定戦＝11・12位決定戦

自衛隊第四空群 19－7 塚本商事

▽9・10位決定戦

自衛隊勝田 16－12 原子力研究所

▽7・8位決定戦

千代田印刷機製造 12（6－2 6－7）9 日本発条

▽5・6位決定戦

日進商会 17（7－8 10－4）12 日本鋼管

▼決勝トーナメント1回戦（＝準決勝）

大崎電気 22（11－6 11－5）11 清国産業

三景 20（8－8 12－8）16 セントラル自動車

▽3・4位決定戦

清国産業 18（9－4 9－4）8 セントラル自動車

▽決勝戦

大崎電気 20（11－8 9－11）19 三景

得	【大崎】		【三景】	得
0	尾崎	GK	西牧	0
0	下里		山本	0
1	簱野		喜田	5
4	近藤		尾形	5
1	谷口		榊	2
7	平岡	FP	高梨	2
1	佐藤	（審・佐分 栗城）	山原	4
1	林		武井	1
0	沢田		伊藤	0
2	飯田		上平	0
1	近森		池崎	0
2	東		竹村	0
20		7MT	（1）	19

女子で小禄抜群の強さ

▼第5回沖縄高校新人大会（3月コザ高）

▽男子準決勝

沖縄工 10－9 興南

糸満 8－7 小禄

▽同決勝

糸満 10（8－7 2－1）8 沖縄工

▽女子準決勝

小禄 9－4 浦添

興南 3－0 首里

▽同決勝

小禄 10（6－0 4－3）3 興南

昇格の鯱クが全勝飾る

▼第9回愛知クラブ対抗リーグ（3月・名古屋体育館）

▽男子1部

愛工ク 27－21 中京ク

中京ク 37－13 東杏会

桜丘会 21－16 東杏会

中京ク 26－13 東海ク

鯱ク 34－13 愛工ク

桜丘会 24－17 東海ク

鯱ク 16－13 桜丘会

桜丘会 不戦勝 愛工ク

鯱ク 14－7 東杏会

東海ク 35－18 愛工ク

鯱ク 19－7 中京ク

鯱ク 12－10 東海ク

東杏会 不戦勝 愛工ク

東海ク 23－11 東杏会

中京ク 24－12 桜丘会

【順位】①鯱ク5戦全勝＝初優勝②中京ク・桜丘会3勝2敗④東海ク2勝3敗⑤東杏会・愛工ク1勝4敗

【2部順位】▽A組①城名ク5戦全勝②大江ク4勝1敗③愛商ク3勝2敗④名大ク2勝3敗⑤尾北ク勝4敗⑥東山ク5敗

▽B組①桜丘会3勝1分②南山ク1勝1敗2分③愛教ク1勝2敗1分④一ノ宮ク1勝2敗1分⑤ワカマック1分3敗

▽1位決定戦

名城ク 25－8 新・桜丘会

日新製鋼呉が優勝

▼広島県一般男子春季選手権（3月・広島）

▽準々決勝（1回戦＝3試合）

三菱レ大竹 16－14 日本鋼管福山

修道ク 17－16 全広商大B

全広商大A 棄権 石播呉造船

▽準決勝

三菱レ大竹 12－11 修道ク

日新製鋼呉 19－13 全広商大A

▽決勝
日新製鋼呉 15（7－8, 8－1）9 三菱レ大竹

日本ビクター岩井が発足
三菱鉛筆の主力も加入

日本ビクター岩井工場（茨城県猿島郡岩井町）は、このほど女子チームを発足させた。

先シーズンまで三菱鉛筆（神奈川＝3月に廃部）の監督だった池田鉄哉氏（芝工大出）が新監督となり、選手も蓮見、八重樫、江川吉田、阿部、阿保、滝らが加入（姫野もヒザ故障が全治しだい入社の予定）、このほか蓮見妹、大塚（以上昭和学院）、小浜（明林高）横島、宮本（以上水海道二高）らの新人が参加している。

茨城県会長に増田氏

茨城協会は空席の会長（全国評議員）に増田一氏（(株)マスダ社長）が就任すると発表した。

群馬理事長に高橋氏

群馬県協会はこのほど役員の一部を次のように変更、理事長に高橋潔氏が新任した。

▽理事長　高橋潔（前橋高教）▽副理事長　町田歳雄、島田正士▽高体連都道府県委員　小林進

なお事務局所在地は前橋市文京町2丁目19・前橋高校内（電・〇二七二－二一－八八一一）

愛知実連の45年度役員

愛知実業団連盟は昭和45年度役員を次のように発表した

▽会長　林達夫（大同製鋼副社長）▽副会長　田中滋章▽理事長　西村亮治（大同製鋼）▽常務理事　戸谷克蔵、鈴木淳蔵、稲住晋二

四国協会日程

四国協会では今年度の行事日程を次のように決めた。

▽四国高校選手権（7月22～24日松山市）▽第25回国体四国予選会（8月30日、高松市）．

全日本総合四国予選会は未定。

大阪高体連役員も

大阪府高体連の昭和45年度主要役員は次のとおり

▽部長　松井秋郎（寝屋川高）▽専門委員長　望月伸三郎（寝屋川高）▽同副委員長　光島磯雄▽地区責任者　丸岡一清、松尾勝也、新村理文、井上裕人

中学大会記録

▼名古屋市冬季大会（2月・名古屋）参加男子17、女子＝10

▽男子準々決勝

菊井 10－9 港北
笹島 18－7 明豊
前津 10－6 守山
桜田 15－4 鳴子台

▽同準決勝

笹島 8－7 菊井
前津 11－8 桜田

▽同決勝

笹島 13（6－5, 7－3）8 前津

▽女子準々決勝

笹島 12－7 守山
港北 6－1 港南
鳴子台 4－2 前津
桜田 11－6 明豊

▽同準決勝

笹島 12－4 港北
桜田 13－1 鳴子台

▽同決勝

桜田 8（1－4, 5－2…1－0, 1－0）6 笹島

編集後記

前号で、今号は世界選手権特集の②として、選手・役員の座談会、選手のリポートなどとともに、豊富な写真で誌面を飾りますとこの欄でお約束しましたが、団長以下の選手諸氏、大会々場では多忙をきわめ、ほとんど写真がとれなかったとのことで、残念ながら、写真はなく、お約束を果すことができませんでした。

いずれ機会をみて、諸所に手をつくし、写真を集め、写真による世界選手権のごときものを一度作りたいと考えています。

座談会にもありますように、今回の選手団、単に好成績を残しただけでなく、種々の研究をつんできています。

そういったものも、折々誌面に掲載させてもらうつもりです。

村田監督に聞いた話によりますと、今回の選手権の種々の成績をコンピューターに入れて、種々のデーターを出しているようです。

これはいずれ、世界選手権とその統計というような形で出版されるとのことです。

何もコンピューターに入れることが科学的というのでないのですが、種々の大規模な統計を処理してくれるコンピューターによる統計は一つの参考資料となることは事実でしよう。

情報処理、確かに重要なことです。これを妥当に使いこなすことが我々の課題です。どのようなシステムになっているか、研究してみる必要はありましよう。

やることは沢山あります。現在の協会の機構ではなかなかたいへんで、多くの新しい面をきり開いていかなければならないのですから、どうしても新しい有能な人材を導入していかなければなりません。編集部でも新しい人材を期待しています。

（TF）

原稿募集

本誌では次のような原稿を募集しています。読者諸兄からの積極的な寄稿をお願いいたします。

★**技術リポート**　未発表のハンドボール研究論文、ハンドボール技術論、ハンドボール調査（データ）をお寄せ下さい。原稿用紙（字数五千字）、薄謝贈呈。

★**ミュンヘンの道**　ミュンヘンオリンピックをめざす斯界への建設的な提言。九百字厳守。〆切日は毎月10日

★**各地の記録**　市大会以上の公式大会記録をお送り下さい。〆切日、用紙は自由ですが、大会後一ケ月以上経過したものは掲載いたしません。また、原文を短かくする場合があります。

★**地方球信**　各地の動き、底辺活動などをお伝え下さい。メモでも結構です。

★**試合写真**　ブロック大会以上の競技会の写真をお送り下さい。

東京都渋谷区神南1の1の1
日本ハンドボール協会編集部
（郵便一五〇）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第七十五号

昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
和四十五年四月二十五日印刷 昭和四十五年五月一日発行

発行所 日本ハンドボール協会
渋谷区神南一−一−一
大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円
(年間購読11回・千二百円)